

---

# 高校生の異世界生活

Galatea

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高校生の異世界生活

### 【Zコード】

N7773T

### 【作者名】

Galatea

### 【あらすじ】

異世界に行ってしまった。たなまや田崎真哉は異世界で生活するためにいろんな場所を巡る。主人公最強です。最強系が苦手な方は読まない方が良いです。

## 1話（前書き）

初めての作品です。

自分ではオリジナル作品とthoughtいますが、似ている作品があつたら  
言つて下さい、自分のを変更か削除しますので。

色々未熟な所がありますが、宜しくお願いします。

いきなりだが、俺は困惑している。何故かと言つと田を開けたら、目の前一杯に森が広がっていたからだ。

「どうなつてんだ？」

何故俺は此処に居るんだ？

確か、いつもの様に学校に登校するとこりで変な石を見つけて、気になつたので拾つて見てみると握りこぶしげりのシャボン玉のような石だつた。

その石が一瞬光つたかと思つたら、突然浮かび上がつて凄い速さで俺の体の中に入つていつた。

そのあと、すぐに体の中が燃えるように熱くなり意識が朦朧としてきた。

「何が……おきて……るん……だ。」

そこで、意識が無くなつた。

「やつだ変な石が俺の体の中に入つてきたんだ。」

服を脱いで確認するが、

何处にも異常は無かつた。何でだ？確かに変な石が俺の体の中に入

つたはずなのに

とりあえず、服を来て辺りを見るが、森しか無い。

「どうしよう?」

辺りを見ても森しかないし、此処は何処の森か分からないうから歩きながらかんがえるか

考へてる途中で、あることに気付く

「つ、月が2つ?」

おいおい、嘘だろ地球に月が2つも無いぞ、此処はまさか異世界なのか?

気付けば走っていた、不安で不安で一杯だった。

俺は走りながら泣いた。

自分はこの異世界で独りなのだと、家族も友人も知り合いも居ない。

石につまずいて、転んでも涙が止まらない。

何で、何で俺がこんな目に合つんだよ。

泣きながら思つていると、

「大丈夫ですか?」

誰かが話し掛けってきた。「だ、誰?」

辺りを見回すが、誰も居ない。

「此処だよ。」

今度は、左耳の近くから声が、聞こえてきた。  
左を向くと、そこには

「こんばんは」

薄緑色の羽根が生えた小さな小人が居た。

## 1話（後書き）

作品を読んで下さりて、ありがとうございます。

## 2話 (複数形)

前回より進めます。

「え、君は誰ー!？」

「私?私は風の妖精だよ。」

「風の妖精?」

「わ、風を操るから風の妖精。」

「風を操る?どうやって?まさか、魔法?」

「どうやって操るんだ?」

「魔法で操るんだよ。」

やつぱり魔法か、でももしかしたら…

「その、風の魔法見せてくれるか?」

「良によ、じゃああの岩を切るか?よく見てるんだよ。」

「岩?岩?てあの巨大な岩の事か!?」

月を背にして前方40M先に、高さ約8M横6Mぐらいの巨大な岩があつた。

「いっくよー、ウインドカッター」  
シユツ

短い音がして、横三日月状の蜃氣楼が巨大な岩を通り過ぎて行った。

岩を通り過ぎた直後に、

岩の真ん中から亀裂が入り岩がゆっくり滑り落ちた。ドシンシッ  
ツツ

パサパサパサ

チーチーチー

岩の落ちた衝撃が凄まじく、森の鳥達が慌てて飛び去つていった。

「す、凄いな」

確かに凄いが、同時に恐いと思った。呪文一つでの巨大な岩が真つ二つになつたのだ。出来るだけ人には、撃ちたく無いな。

「凄いかなー？子供でも出来るし、見たこともあるんだよ？」

「えっ？」

何て答えば良いんだ？

疑われると、思うがこれしか無い。

「どうしたの？」

「実は、俺記憶が無いんだ。」

「えっ？ そつなの？ 自分の事や、この世界の事覚えて無いの？」

「う、うん自分の名前以外覚えて無いんだ。」

「そつなんだ… 君の名前は？ 私は風の妖精シルフィーだよ。」

「田崎真哉だけど、信じてくれるの？」

「うそ、嘘じるよ。」

「あ、あつがとい。」罪悪感があるナビ、こいつが本当の事を話す。

「ねえ、ママって呼んで良いく。？」

「こ、良こぜ、俺もシルフィーって呼ぶやつ。」

「うそ、嘘こよ。」

「ねえ、ママ」

「何? どうしたの?」

「私と、契約しない?」

「け、契約!?」

読んで下せりてあつがといへりぞこました。

3回目(複数)

前回までの事です。

「そう、契約

「契約すると、どうなるんだ?」

契約すると、代償が取られたりするのかな?

「契約すると、私の場合は風の魔法の威力が上がるし使いやすくなるよ。」

「私の場合?」

「そう、私の場合は風の魔法が得意だから風が使いやすくなったり威力が上がる。だけど、契約する者や種族によつて違うんだよ。もし、水が得意なら水が使いやすくなったり威力が上がるし、武器が得意だつたり格闘が得意だと武器が使いやすくなったり、格闘が上手くなるんだよ。」

「代償を取られる事つてあるのか?」

「あるにはあるよ、例えば戦つて勝つたら契約出来るけど、負けたら何かを取られたりする。後は欲しがつてる物をあげれば契約出来る者も居るよ。」「色々な種族が居るんだな。」

「うん、それで契約の事なんだけど契約しても大丈夫?」

「良いけど、俺契約の仕方分からないぜ?」  
「どうすれば良いんだ?ゲームや小説、漫画での契約は呪文か魔力が必要だった筈。」

「魔方陣の中に入れば分かるから、大丈夫なんだよ。」

「そ、そりゃんだ」

それでもやっぱり不安だな、出来るだけ頑張つてみるか。

「よし、出来た。」

「えつ何が？」

「魔方陣だよ、契約にはこの中に入つて行うんだよ。」

なんだこれ？

そこには、二重の丸があり中の丸には六芒星で、外側の丸には英語に似ている文字があつた。

「儀式用の魔方陣？」知らない筈なのに意味や文字が読める。何故だ？まさか…あの変な石のせいか？「分かるの？」

「えつ？まあ、なんとなく分かる。」

やば、声に出しちました。

「へえー、人間に読める人は居ない筈なんだけど、でも読めるって事は凄い事何だよ。」

「そりゃんだ？」

「うん、人間は魔方陣は書けるけど、意味や文字が読めないんだよ。」

「

「 なんだ… 人間以外は読めるのか? 」  
あまり口に出さない用にしないとやばいな。

「 読めるけど、読めたり書ける者はあまり居ないんだよ。 」

「 どれぐらいの種族が書けたり読めるんだ? 」

「 書けるのは、種族のトップクラスぐらいかな? 読めるのは、上位、中位ぐらいだよ。もし、種族が100万いるとする書けるのは10人で、読めるのが20万人ぐらいだよ。 」

書ける奴少ないな~。までよじやあ、書けるシルフィーは?

「 じゃあさ、何でシルフィーは書けるんだ? 」

「 私? 私はねえ~、妖精のトップだからだよ。 」

「 ほ、本当にか? 」  
嘘なら、動搖する筈。

「 本当だよ。 」

あれ? 動搖しない本当なのかな? 試しに言つてみるか  
「 小さいのに? 」

「 ち、小さく無いんだよ。 よ、妖精は皆わ、私ぐらいだよ。 」  
動搖してる。多分妖精の皆に言われた事があつて、気にしているの  
だろう。

「擬人化すれば、私だって」

「擬人化？」

「人に変身するんだよ。擬人化して人間の村や街に住んでる種族もいるんだよ。」

狐や狸みたいに化けるのか？

「狐や狸みたいに化けるのか？やっぱり、魔法で？」

「狐、狸？なにそれ？擬人化は魔法しか、無いんだよ？」

この世界では、狐や狸が居ないのか？まあ異世界だからな。

「それじゃあ、いつくよー、えい。」

ピカ一

「うわ、眩し！？」

眩しいけど、その前に呪文言つてないよな？

「やつたー、大成功。」

「幼女？」

パチパチ「ゴシゴシ

瞬きしたり、目を擦つたがやつぱり、目の前には10歳ぐらいの幼女が居た。

「ねえ見てみて、成功した…よ。」

「ど、どうした？」

「アヤ……が……い。」

「えつ? 何? よく聞こえなによ?」

「マサヤの方がでかいって、聞いたの……」

「み、耳が痛い。」

どうしよう? 何で言えば良いんだ?

「うわーん、何で私は小さいんだよ~。」

やばこ泣いてる。じ、どうしよう? どうあえず、慰めるか。

ポン

「えつ?」

「だ、大丈夫だって、いつか大きくなれるよ。」  
慰め用として、つい頭を撫でたけど大丈夫かな?

「ほ、本当?」

「なれると思つよ、妖精のトップなんだろ?」

「うそ、あり……が……。」

スースー

「寝たか?」

やべえーよ、俺超恥ずかしい事言つちゃつたし、頭まで撫でつけられたらよ。出来ればもうやりたくないな。

「俺も遅よ。」明日は良い一日になつりますよ~。」

3話（後書き）

読んで下せりてあつがといへりぞこま。

## 4話（前書き）

変な所があるかもしませんが、初心者ですので許してください。

## チュン チュンチュン

「う、うん？ 朝か、あれ？ 何で俺こんな所で寝てるんだ？」

「スースー

「寝息？」

俺は左を見て何故こんな所で寝ているかを思い出した。

「そうか、俺は異世界に居るんだよな。」

夢だつたら良かつたんだけどな。でも、地球に帰つても親は、小さい頃に交通事故で天国に逝つたし心残りがあるのは友人と、もう遊べない事と俺を引き取つてくれた、おじさんを地球に残して来た事だな。おじさん、俺にいろんな事教えてくれたよなー。武術も教えてくれたな。柔道、空手、合気道、剣道、棒術まで幅広く教えてくれて、この世界で役立つと思うから感謝しないとな。

「おじさん、前言つてくれたよね、自分の道は自分で決めろつて、だから俺この世界で頑張つてみようと思つ。おじさん、今までありがとうございました。」

「グギュルル

「腹へつたな、食べられる物探してくるか」

遠くに行くと、迷いそつだから少し歩いて無かつたら、シルフィーを起こして一緒に探すか。

「昨日切つた岩を田印にして、何か探すか。」

見渡す限り木しか無いから、木の実を探すとするか。

歩いて一時間

木を見ている時に気がついた…

「太陽も2つあるんだな。」

歩き続けて一時間

「やつと見付けた。」

見付けたのは良いんだけど、全然疲れて無いんだよな何でだ？高校や中学の時に部活はやってないし、おじさんに戦術を教えて貰つてただけだから、体力には自信あるけど、流石にここまで体力が持つ自信は無いぞ。

心当たりがあるのは…

「やつぱり、あの変な石だよな」

まあ良いか。今は困つてないし、後で考えよ。

それよりも、今は木の実をどうやって取るかを考えるか。

「うーん、木を登りたいけど足を引っ掛ける場所が無いからなー、あつそうだ魔法があるじゃん。」

だけど、上手に出来るかな？まあ物は試しだ、呪文はシルフィーが昨日やつたので良いのか？確か…

「ウインドカッター」あれ？何も起きないぞ、呪文は合ってる筈なんだけど何か足りないのか？足りないとしたら多分…イメージ、か？試して見よう、じゃあ、シルフィーのやつた魔法を思い出して…確か三日月状の蜃気楼だったから、それをイメージして…よし

「ウインドカッター」

シユツ

昨日と同じように短い音がして、木の実と木を通りすぎていった。

木がゅっくりマサヤに向かつて滑り落ちてきた。

ズシン

「あ、危なかつたー」

もう少しで、当たるとこだつたな、魔法を使う時はもつと気をつけないとやばいな。

「少し失敗はしたが、これで食べ物は確保したな。」

そろそろ、シルフィーの所に戻ろう。

歩いて一時間した所で、奥の草が揺れた。

ガサガサガサ

「何だ？」

俺は、咄嗟に身構えた

身構えた直後に何かが飛び出してきた。

## 4話（後書き）

読んで下せりて、あらがとうござります。

## 5話（前書き）

戦闘シーンを書いてみました。全然上手くありませんが許して下さい。

ガルルルル

「狼？いや、異世界だから魔獸か？」

目の前に狼に似てる魔獸？が敵意剥き出しで俺を睨んでいる。ガウッ

魔獸が俺に飛び込んで来たのだが、物凄く遅い。これも変な石の影響なのか？だが、今はありがたい。

俺は飛び込んだままの体勢でいる魔獸の横に移動し…「はつ…！」魔獸の背中に3割の力で踵落としを当てたら…

ギヤン

ドガーンッ

地面に1メートルのクレーターがありクレーターを中心に直径約5メートルの蜘蛛の巣状のひび割れが出来ていた。

「おいおい、まじかよ力の半分も出していないのに地面にクレーターが出来るのかよ。」これは、力を加減しないと本気でまずい事になるな。

「とりあえず、シルフィーの所に戻つてから考えよ。」

そのまま、歩き続いている…

「お、いたいたおーいシルフィー、シルフィー？」  
スースー

「よく寝てられるな、凄くでかい音がした筈なんだけどな。」

起きるまで、力の加減を練習しどとか。何か無いかなー…

よし、あの石で試して見るか。

「ふん！！」

あれ？思いつきり握って見ても砕けない… そつだ、意識しながら握れば砕ける筈。

1割

ガリン

1割で砕けたな… ジャあ何時もは力をOFFにしといて、力を出す時には何割かを意識しとけば大丈夫か？試して見るか。

OFF

「よし、握つても砕けない。」

2割

ガリガリ

「粉々になつたな。」

力の加減は大丈夫だな。

「う、うん？」

「起きたか？」

「うん、起きたんだよ」

キユルルル

「腹、減つたか？」

「う、うん」

「これで良いか？さつき、取ってきたんだが…」

でも、食べられるのか？形はリンゴに似ているんだよな。

「あつベリーの実だ。」

「食べられるのか？」

「うん、ベリーの実は甘酸っぱくて、美味しいんだよ。」

「へえ、美味そうだな。」

「食べて見るか…

「待つて、皮には少し毒があるから剥いた方が良いんだよ。まじかよ、あつぶねえ

「や、先に言つてくれよ。」

「記憶が無いのを忘れていたんだよ。だけど、毒つて言つても少し痺れる位なんだよ。」

「ナイフ、持つてるか？」

「持つてないんだよ。何で？」

「持つてないのか…

「ベリーの実の皮を剥ぐのに必要だから。」

「魔法で剥けるんだよ。」

「また魔法か…」

「どうやって？」

「見てるんだよ、風よ」

シルフィーの右手の指先に風が集まっているけど…

「それで、剥けるのか？」

「うん、風を指先に集めてナイフの代わりにしているんだよ。」

「へえ、凄いな… そうだ、魔法を教えて貰おう。  
「シルフィー、食つてゐるのに悪いんだが俺に魔法を教えて欲しいんだ。」

「うーん」

「無理なのか？」

「違うんだよ、でも……」  
「どうしたんだ？」

「私はイメージでやつてるから、何て言えば良いか分からないんだよ？」

「なるほど。」  
「魔法はイメージか…… 様は、合つてたな。」

「あと、違う妖精に聞いたんだけど……」

「何を？」

「人間はイメージが出来ないから呪文で補つてゐるらしいんだよ。だけど、呪文何でおまけに過ぎないんだよ」

「そうなのか？」

「呪文がおまけって、イメージ凄いな。『うん、割合にするなら呪文

「1割イメージ9割だよ。」

本当にイメージって凄いな。俺はありがたい、少ないけどゲームや漫画、小説で見たり、想像した事があるからな。

「先ずは、これで試すか。」俺は左手でベリーの実を持って、右手の人差し指に風が集まってるイメージをする。

「出来たけど、人差し指に風が纏つただけ？」

「イメージで出来た人間は居ない筈なんだけど…イメージを出来ただけでも凄いんだよ。」

最初に何て言つたんだ？

「何か、足りないのか？」

「風を集めるだけじゃ無くて鋭くすれば良いんだと思うんだよ。」

そうか、風で包丁やカッターの様に鋭いイメージをすれば良いのか。

「サンキュー」

「サ、サンキュー？」

やべ

「あ、ありがとう。」

「？」

英語は通じないみたいだな。

変な所があつたかもしだれませんが許して下さい。

文才が欲しい。

右手の人差し指に日本刀の様に鋭い風をイメージ、すると…

「出来た、さつきと違つて風が細いし、ナイフの様な形になつてゐる。

」

本当に切れるのか？試せる物は…木で試すか。

「何処に行くの？」

「この風で本当に切れるのかを木で試す。」

俺は右手の人差し指を見せながら木の方へ歩く。

よし、先ずは刺してみるか。

俺は人差し指を木に刺したが、刺した感じがしない、切れないのか

？右手を下ろしながら考えていると…

＝＝シ＝＝シ＝＝シ

バギツ

いきなり木が割れた。

「切れ味凄いね…何をイメージしたの？」

日本刀は知らない筈だから…

「え、えっと剣の様に鋭いのをイメージした。」

「でも、この切れ味は名剣並みだよ…イメージが上手いんだね。」

「う、うんありがとう」

勘違いしてくれて助かった。でも本当に切れ味が凄い木の切つた所がサラサラしてゐる。切れる事は分かつたから、ベリーの実の皮を剥くか。

俺は左手にベリーの実を持つて、回転させながら丸く切つていく。

「切るの上手いね。」

「ありがと。」

おじさんは家庭面が駄目だったから、毎日俺が家の事をしていたから掃除、洗濯、料理には自信がある。

「いただきまーす。」

シャリッシャリ

美味しいな。食感や味はリンゴに似てて、噛む事に果汁が出てくる。

「美味しい。」

「だよね、私はベリーの大好きなんだよ。」

「じゅあ、もづ一 個やるみ。」

「良いの?」

「良いぜ、そのかわり魔法を教えて欲しい。」

「良いけど、私も詳しくは知らないよ?」

「それでも教えて欲しい。」

「分かった」

「文字は読める?」

「多分。」

シルフィーは浮かんで何かを書き始めた。

「これは読める？」

見たこと無い文字なのに、読める。

「私は誰ですか？」

「読めるみたいだね。魔法の何が知りたいの？」

魔法のことを色々教えて欲しいけど先ずは…

「魔法の使い方を具体的に教えて欲しい。」

「分かった。だけど、今から話す事は、仲間達に聞いた事があるだけだから本当か嘘かは分からんんだよ？」

「大丈夫だが、文字が読めるのと関係があるのか？」

俺にしたら、異世界の文字を読めるって確認出来たから良かつたが…

「うん、もし言葉で理解しにくかつたら絵や図を書こうかなって。」

「そうか、ありがと。」

「いえいえ、じゃあ説明するよ。あと、説明が終わったら契約するからね？」

「了解」

## 6話（後書き）

読んで下せりてあつがといへりぞこま。

7話（前書き）

物語が進んで無い気がする。

「先ずは私達、者の魔法を説明…」

「また、者って誰?」

「人間意外の種族だよ。」

「何で分けるんだ?」

「それは…人間と一緒にされるのが嫌な種族が沢山いて、殆んどの種族は者って言つてるんだよ」

「じゃあ、シルフィーは…?」

「シルフィーは?」

「私も人間は嫌い。」

「何で?」

「私達者は、感覚的に分かるんだよ。例えば、この人は好い人、悪い人とかがね。」

「俺はどつち何だろう?」

「じゃあ、何で俺と契約するなんて言つたんだ?」

「さつき私達者は、感覚的に分かるって言つたよね?」

「ああ、確かに言ったな。」

「だけどね、マサヤには感覚的に分からないんだよ。」

「どうした事だ…？」

「俺が、変なのか？」

「違うよただ、マサヤの近くで近づくと[外心出來る]気がするんだよ。」

安心ねえ…

「まあ良いか。」

「それじゃあ、説明に戻るよ。」

「おー。」

「私達者の魔法は大気中の魔力を使つけど、種族によつて魔力の使い方が違うんだよ。私達妖精や精靈の魔法は、主に魔法での遠距離や補助しか使わないんだよ。」

じゃあシルフィーは援護系だな。

「者つて、全員魔法が使えるのか？」

「違うよ例外はあるけど、だいたい上位の者や頭の良い者しか魔法は使えないんだよ。」

「他にはエルフかな、エルフの女性の魔法は妖精や精靈の魔法と同じで魔法で遠距離や補助もするし、『』を使う者も居るよ。」

エルフはやつぱり耳が長かつたり、美形が多いんだろうな。

「エルフの男性は接近戦で、魔法は女性と違つて魔力しか使えない。魔力だけでも接近戦で役に立つんだよ。魔力を体の部分に集める事で集めた部分を強化出来るんだよ。」

魔力の使い方も覚えといた方が良さそうだな。「あとはドラゴンだね。ドラゴンや飛竜種は、ブレスを撃つよ。種によつてブレスは違うんだよ、例えばファイヤードラゴンは炎のブレスで、アイスドラゴンは氷のブレスを撃つんだよ。」  
この世界にドラゴンとか居るんだな。

「ドラゴンって、強いのか？」

「強いよ、種族の中で最強つて言われてるよ。」  
やつぱり、最強なのかゲームや漫画の中でも最強だしな。  
「それに…ドラゴンは赤ちゃんでも例外無くAランク以上だよ。」  
「ランクって何だ？」

「ランクは強さの位だよ。」  
位つて言われても基準が分からん。  
「Aランクって強いのか？」  
「うん、小さな村を壊せる位強いよ。」

「強！」流石は最強種、赤ちゃんでも小さな村は壊せるのか。

## 7話（後書き）

読んで下せりてあらがとうござります。

殆んど説明です。

「次は、人間の魔法の事を説明するよ?」

「分かった。」

「人間は自分の中にある魔力で魔法を使っているんだよ。」

「じゃあ、魔力を使いすぎたらどうなる?」

「人間にとつて魔力は生命力だから使いすぎると、寿命が短くなったり凄い脱力感になるし、無くなつたら死ぬんだよ。」

「魔力はどうやつたら回復するんだ?」

「寝たりすれば回復するんだよ。」

「じゃあ、大気中の魔力を使えば……」

「無理だよそこが、人間と者の違いだよ。」

「違う?」

「何が違うんだ?」

「大気中の魔力はイメージが出来れば使えるけど、人間には使えないんだよ。」

シルフィーは確かに人間はイメージが出来ないって言つてたな。

「人間はイメージが出来ないからか？」

「それもあるけど、使えない一番の理由があるその理由は…人間が大気中に魔力があることを知らないからなんだよ。」

「大気中に魔力があることをもし人間が知つていたら？」  
もし知つていたら使いすぎる事も無いと思うが…

「知つていたとしても、無理だね。人間はイメージが出来ないって言つたでしょ？」

「そうだつたな…

「人間の魔力つて多いのか？」

「賢者や帝と呼ばれている人間は多いんだよ。」

「普通の魔法使いは？」

知らないで魔法を使いすぎると、誰かに目を付けられそつだからな…

「確か…1000だつた気がするんだよ。」

「多いのか分からんな…

「魔法のランクとかあるか？」

「あるんだよ」

言葉じや分かりづらいな

「空中に弱い順番に書いてくれ。」「良いよ確か…

下級魔法 < 中級魔法 < 上級魔法 < 下級魔術 < 中級魔術 < 精靈魔法 <  
上級魔術 < 古代魔法 < 究極魔法

書いたんだよ。」

魔術？

「魔術って何だ？」

「魔術は魔方陣を使つた魔法なんだよ。」

確かに人間は書けるけど、意味や文字が読め無いんだよな。

「人間は使えるのか？」

「使えたなら王国魔術師団並みだよ  
王国？ まあ後で分かるだろ。」

次に精靈魔法って何だ？

「ありがとう… 精靈魔法って何だ？」

「いえいえ、精靈魔法は精靈の力を借りて使つ魔法の事だよ。」

「精靈の方が妖精より凄いのか？」 「逆だよ。位でだつたら精靈より妖精の方が上なんだよ。」

「本当なのか？」

俺は精靈の方が上だと思つが…

「本当なんだよ。大昔に精靈と妖精で話し合つて決めたんだよ。」

凄いな、俺は精靈の方が上だと思つていたが…

「じゃあ何で、精靈魔法何だ？」

「それは知らないんだよ。」知らないのか…まあ良いや。

「他に魔法の事で聞きたい事ある?」

「ある。」

俺が今知りたいのは…

「弱い順番で魔力の消費量を書いてくれ。」

シルフィーは普通の魔法使いの魔力量が1000って言つてたから消費量を聞いて調整すれば、目立たない筈。

「良いよ

下級魔法 1000~700

中級魔法 10000~2000

上級魔法 60000~9000

下級魔術 10000~30000

中級魔術 40000~70000

精靈魔法 10000~100000

上級魔術 200000~350000

古代魔法 400000~700000

究極魔法は誰も使えた事が無いから分からんんだよ。」

「普通の魔法使いで中級魔法一発が限界か…

「賢者や帝と呼ばれている人間の魔力量は?」

「確かに…20万~30万位の筈なんだよ。」

「普通の魔法使いと比べたら凄い差だな。」

だが…下級魔法と中級魔法の違いが分からんから、人の前では、使

えないふつをしておくか。「次は契約なんだよ。」

シルフィーは安心出来るつて言つたけど…

「本当に俺で良いのか?」

「うそ、マサヤだから良こんだよ。」

「何だかそういうふうに思われるな。

「じゃあ、そこの魔方陣の中に入るんだよ。」

「了解。」

読んで下せりてあつがといへりぞこま。

小説書くの難しい。

契約か緊張するぜ。

「緊張しなくても大丈夫なんだよ。」

少しは楽になつたかな。

「ありがとう」

「いえいえ。じゃあ、始めるよ。」

「おう」

俺が魔方陣の中に入つた瞬間契約に必要な呪文が頭の中に入つてき  
た。これを言えば良いんだな…

「我風の妖精シルフィーは田崎真哉を契約主と認める貴方はこの契  
約を認めるか?」

「我田崎真哉は風の妖精シルフィーの契約を認める」

「此処に契約を結ぶ」

ピカ

魔方陣が一瞬だけ光り消えて無くなつた。

「終わったのか?」

「もう少しで終わるけど、我慢してね？」

何を？と訊ねうとしたが、

「いってええええ」左脇腹の猛烈な痛みで言えなかつた。

「言つて無かつたけど、契約を行つと体の一部に契約の証しを彫るからかなり痛いよ。」

「やうやう……ことは……先に……言え……」  
くやうかなり痛かつたぜ。

証つて言つてたな、どんな証だ？俺は服を捲つて左脇腹を見たら…

「悪くは無いな。」

俺の左脇腹には天使の翼を広げた様な緑色の翼の跡が残つていた。

「改めて、これからよろしくね。」

シルフィーは小さい右手を真哉に差し出す。

「ああ、此方こそよろしく。」真哉はシルフィーの小さい右手を優しく握つた。

読んで下せりてあつがといへりぞこま。

## 設定（前書き）

変わることもあると思いますが、設定は大体これです。  
8月10日編集しました

## 設定

魔物、魔獸ランク

F・・・殆ど無害な魔物

E・・・初心者でも勝てる位

D・・・初心者3人なら勝てる位

C・・・熟練者なら勝てる位の魔物  
(熟練者は初心者5人分)

B・・・熟練者5人なら勝てる位の魔物

A・・・小さな村を破壊出来る位の魔物

S・・・小さな街を破壊出来る位の魔物

SSS・・・国を破壊出来る位の魔物

(SSSランクは撃退した事はあるが、倒した者は誰もいない。

(獸系は魔獸、獸系意外は魔物)

村・街・国の人数設定

小さい村・・・600人

中くらいの村・・・300～500人

大きい村・・・1500～2500人

小さい街・・・3000～5000人

中くらいの街・・・1万5000～3万人

大きい街・・・5万～10万人

国・・・50万～300万人

ギルドランク

F→D・・・初心者

C→B・・・熟練者、王国兵士並

A・・・王国騎士団兵士並

S・・・王国騎士団副隊長並

SS・・・王国騎士団隊長、近衛兵士並

SSS・・・賢者、帝並

(魔物のランクと比べると、F→Bは1ランクA→SSSは2ランク下がる)

## 設定（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

## 10話（前書き）

前半は説明です。後半に戦闘を入れてみました。まだまだ未熟者ですが宜しくお願いします。

「これからどうするの?」

確かにどうするか?うーんまずは…

「魔法の練習して良いか?分からぬ所は教えて欲しい。」

「分かつたんだよ。」

「ありがと!」

目立つのは好きじゃないし、目を付けられると利用される可能性が高いから調整しといて損は無いだろ。

「いえいえ」

先に色々聞いてから魔法の練習をするか。

「属性は何個あるんだ?」

「確か…12個あるんだよ。」

思つてたよりあるな

「それにも強さとかあるのか?」

「あるけど、魔法は魔力で作るから魔法同士なら魔力の多い方が強いんだよ。」

魔力の多い方が有利なのは分かつたが…

「属性に強弱は無いのか?」

「あるんだけど…言葉じゃ伝わりにくから、書いてあげるんだよ。」

「

「火、水、土、風＝下級魔法

炎、氷、大地、嵐＝中級魔法

闇、光＝上級魔法

時、空間＝上級魔術

「時と空間って何だ？」

「時と空間は文字通りで時は時間を使す事と速くする事は出来ないけど、時間を止めたり、遅くする事は出来る。空間は場所と場所を繋ぐ事が出来るし、相手を自分で作った空間に閉じ込める事も出来る。」

「時と空間って凄いな……ちょっと待て今確か…  
「空間を作る？空間って作れるのか？」

「作れるけど、今作れる人間や者は居ないんだよ。」

「今つて事は、前に誰か作った奴が居たって事だよな？  
何で作ったか分かればもしかしたら…

「確かに前に作った者は居たけど、その者はもう亡くなつたから今では作れる人間や者は居ないんだよ。」

「その者に会う事は出来ないのか…

「何で空間を作ったか知ってるか？」

もしイメージで作ったなら俺もイメージで空間を作る事が出来るか

もな。

「うーん…確かに…イメージだつたかな、でも何でそんな事聞くの?」

イメージか、よしイメージなら出来るかもな。  
「出来るか試そいつと思つてな。」

「む、無理なんだよ、今まで沢山の者が挑戦したけど誰も出来なかつたんだよ。」

確かに沢山の者が挑戦しても出来ないから、俺も出来るか分からないうが…

「それでも、やつてみないと分からぬいだろ?」

「はあ、分かつたんだよ、でも氣おつけるんだよ、いきなり上級魔術を使う人間を見た事が無いから何が起こるか分からぬいんだよ。」

シルフイーに心配掛けちまつたな。

「よし、やつてみるぜ。」空間に黒い小さな穴が有る事をイメージ

「凄いんだよ、小さいナビゲーションと出来てるんだよ。」

確かに出来てゐるが…此処からが本番だ。

黒い穴が俺の身長178cmと同じ位に広がつていぐのをイメージ

「凄い、黒い穴が広がつていくんだよ。」

「よし、完成」

少しでかいが完成だ。 2m位あるかな

「今まで沢山の者が挑戦して、出来なかつたのに本当に真哉は凄いんだよ。」

「ありがとう」「後はこの空間に入つて魔法の調整をしてから、人の居る所に行つてみよう。

ガサガサガサ

「何だ?」

まさか、またあの狼か?

キューン

ガウ

狼は分かつたが、何だこの白いの?

「は、白竜」

竜つて事は赤ちゃんでもかなり強い筈だが……

「あの狼つて強いのか?」

「狼? ファングの事?」

この世界では狼じゃなくてファングって言つのか。

「ファングつて強いのか?」

「竜に比べたら弱いよランクならDなんだよ。」

じゃあ何で弱い奴に襲われてるんだ……うん? 右足に何か刺さつてるぞ。

「シルフィー、白竜の右足に何か刺さつてるぞ。」

「本当、凄い血の量早く助けてあげるんだよ。」

確かにあれじや可哀想だ。

「ああ、シルフィーは此処で待つてろ。」

「私も付いていくんだよ。」

「分かった、俺はファングと戦つからシルフィーは白竜の所に行つて治療してくれ。」

「分かつたんだよ。」先ずは、白竜からファングを離したいがどうする…

「風よ」

ブン

シルフィーの右手から蜃氣楼の塊がファングに向かっていき…

ギャン

ファングに当たって、白竜とファングを離した。

「流石シルフィー頼りになるぜ。」

「えへへ、ありがとわ」

本当に頼りになるぜ

「じゃあシルフィー、白竜は任せたぜ。」

「うん、真哉も気おつけるんだよ。」

「おう」

ガルルル

ファングは俺に敵意剥き出しだな。

「ふう」

力はOFFだな…この世界に来て身体能力が上がってるからファン  
グ相手に何処まで行けるか試して見るか。

ガウ

「おつと」考え方は後だな今は「いつに集中するか。

真哉は右腕を腰の近くで止めて左腕を肩と同じ位の位置に持ち上げた

「我流攻守の構え」

左腕で相手の攻撃を捌いて右腕で攻撃する

攻守の構えと言っているが俺は殆んど相手の様子見に使う。

ガウ

ファングが真哉に噛み付こうと飛び込んで来た。

前のファングと同じパターンだな…なら俺は少し変えるか

真哉はしゃがんで右手を握りファングの…  
「はつ！」

ガツ

喉を潰し少し浮き上がった所で回し蹴りで…

バギ！

ファングの頭蓋骨を碎く

「うつ」

グロい事になつたな、今のは魔物だから良かつたがもし人間だつたら吐いてたな。

シルフィーの所に行くか

「あつ、真哉大丈夫だつた？」

「ああ、俺は大丈夫だが白竜は大丈夫か？」

「それが…刺さつてる物は抜いたけど血が止まらないんだよ、どうすれば良いの？」

「うーん、上手く行くか分からんが試す価値は有るだろ」「俺がやつてみる。」「

体が小さいな大体30㌢位か？

真哉は白竜に近付いて白竜の右足を両手で優しく被せる

「治つてくれよ。」「

傷が治つていくのをイメージすると…ピカ一

眩しくない優しい光が白竜の右足を包んだ。

「な、治つた。シルフィー治つたぞ」

「えつ本当に？」

「ああ、見てみろ」

「本当だ、傷口が無い」

「だが、血を流し過ぎたから食べ物と暖かい物が必要だ」「食べ物なら私が探して持つてくるんだよ。」「

シルフィーは羽を使って飛んで行った。

じゃあ俺は暖かい物だが…あれを使うのか?いや、今はそんな事考  
えてる暇は無いな。

真哉はファングの所に向かった。

1-0話（後書き）

読んで下せりてあつがといひざれこます。

## 1-1話（前書き）

更新遅れてしませんでした。

ファングの所に来たは良いが、どうせつて毛皮を取るんだ？

取り敢えず…

「風よ

右手に風を集め風の包丁をイメージ

ファングの腹に風の包丁を入れ毛皮を取っていく…

1時間後…

「で、出来た」

毛皮は取れたが凄くグロい事になつちました。両手は血まみれだし、服や顔にも血が付いたしな。

「これじゃあ、出歩け無いな。」

水をイメージして血を落とさないと…先ずは両手だな。

「水よ

20cm位の水の塊をイメージ…おつ出来た

ビチャ

あれ、落ちた？うーん……そういうえば、浮かぶイメージを忘れてた。

「水よ

水の塊が少し浮かぶイメージ…

「出来た」

手と顔と序に毛皮を洗つたのは良いが服はどうするか？

俺の着てる服が綺麗なイメージすれば良いのか？まあ試さないと分からんしな。

今度は少し大きい30㌢位の水の塊が少し浮いてるイメージ  
「出来た。」

次は服を脱いで服を、水の塊の中に入れて洗濯機の回転をイメージ  
しながら綺麗になつていいくのをイメージ  
「凄えー、水が回転してる」

5分後

もう良いかな？取り出して確認するか。

「完璧、血の跡が無いぜ。」  
後は乾かすだけだな。

「風よ」

イメージは…ドライヤーだな。服と毛皮に風を纏わせて完成。

3分後

乾いたか？

「おー、少し湿つてるけど大丈夫だろ。」よし、じゃあ白竜の所に  
戻ろう。お、まだ白竜は寝てるのか？  
「結構時間掛かつたと思ったんだがな。」  
まあ良いや、この毛皮を被せとくか。

真哉が白竜に毛皮を被せ終わつた瞬間に…

パチ

「うお、びっくりした。」

白竜が目を覚ました。

キヨロキヨロ  
キューン

白竜が辺りを見回して、真哉を見て鳴いた。

「やべ、超可愛い。あいだ」

真哉は手を広げながら、白竜を呼んでみた。すると…  
キュイキュイ

白竜が鳴き声を上げながら翼を使って真哉にゆっくり飛び込んだ。

「超可愛いぜ。よしよし」

ナデナデ

ちょっと「ナデナデ」してると、見た目以上に柔らかい。俺  
は白竜を撫でながらそう思つた。

そういえば、シルフィー遅ーーな、何処まで行つたんだ？

真哉が考へてみると…

「お、お待たせ~」

シルフィーが葉っぱで出来たでかい籠をフラフラしながら持つてき  
た。

「おじおじ、大丈夫か？」  
俺が支えながら言つと…

「あつ、白竜だ田を覚ましたんだね。」

「籠を俺に任せて白竜の所に行きやがった。」

「おつと」

危ねえ落とす所だつたぜ。これ何キロあるんだ?身体能力が上がつてゐおかげで楽に持ち上がるが、俺が見た所30k~40kはあるぞ?」

「シルフィー」れどうやつて、持つてきたんだ?」

俺は白竜を見ているシルフィーに聞いて見た。

「風を使って重さを軽減しながら持つてきたんだよ。」

魔法つて万能だな。

「籠の中身は何が入つてるんだ?」

ベリーの実は分かるが、俺の知らない色や形が違うキノコや、草、木の実、蜂蜜がある。

「説明してあげるんだよ。」

「これはランブルの実と書いて、ベリーの実より甘味が強く、酸味が弱いんだよ。」

ランブルの実は、皮が黄色いブドウだな。

「次にこれはケートの実と書いて、ベリーの実より甘味が弱く酸味が強い」

形は、なしに似てゐるな……だが、色が黄色?

「味見していいか?」

「良いんだよ。」

「風よ」

右手にナイフをイメージ。  
「イメージ上手くなつたんだよ。」

「ありがとうございます。」

左手にケートの実を持つて、風のナイフで皮を剥いていく。

「いただきます。」

俺はケートの実を一口食べたが…

「酸つぺえええ」

後悔した。

「酸味が強いつて言つたんだよ?」

確かに言つたがレモンより酸つぱいとは、思わなかつたぜ。

口直しに…

「ランブルの実をくれ。」

「はい。」

「ありがとう」

これは大丈夫だよな、確かにベリーの実より甘味が強いつて言つてた  
し…

「いただきます。」

おつ美味い、色は違うが味はブドウにそつくりだな。  
「酸つぱいの直つた?」

「ああ、直つたありがとう」

「いえいえ、じゃあ改めて説明するんだよ。」

「これは、薬草だよ。苦味が強いけど、根っこを飲めば傷の痛みが和らぐし、葉っぱを傷口に張れば治りが早くなるんだよ。」

見た目は「ボウより小さい位で、約20?つで所か。

「次に」アーズキノコは少し甘味があつて、生でも食べられるし、調合に使われる時もあるんだよ。」

アーズキノコは青いシイタケだが…

「調合って何だ?」

「調合って言ひのは素材と素材を合わせて新しい物を作るんだよ。」

調合って面白そうだな

「俺でも出来るのか?」

「簡単な物なら出来るけど、専門的な知識が無いと難しい物は作れ無いんだよ。後は…街に行けば本に載ってるんだよ。」

一樣出来るのか、難しいの作って見たいが…本読むの苦手だから、暇があつたら見つけて読んで見るか。

「教えてくれてありがとう」

「いえいえ、説明続けるんだよ。」

「これはアルトーンキノコと言つて、香りが良くて、味も凄く美味しいんだよ。だけど、これは見つけるのが大変で数が少ないから、街で買うと凄く高いんだよ。」

形は松茸に似ているが…色が紫かよ。何か危ない色してるな。

「最後にこれはアジューダの蜜と言つて、アジューダと言つ魔物が花の蜜をタンゴ状にして固めた物なんだよ。集める花の蜜によって

味が違うナビ、殆どは甘こんだよ。」

形は「コトコの卵か…割れば蜜が出て来るのか?」「説明あつがとつ。

「  
「いえいえ」

だけど…

「田畠ひこうに沢山食べられるのか?」

「食べられないんだよ。」

「じゃあ何で?」

「序でに私達も食べようかなって。」「成る程な。

「あつがとつ、じゃあ皿で食べるか。」

「うん」

キューイ

「じゃあ俺が料理するぜ」

「私は皿の代わりを探して来るんだよ。」「皿の代わりか?」

「待つてくれ、試したい事がある。」

「うん? 分かったんだよ。」

「水を浮かせる事が出来たしもしかしたら…」「風よ」

ベリーの実が浮くのをイメージ…

「浮いてる。」「

「目代わり探さなくて大丈夫だろ?」

「うん、でも本当に凄い。こんなに早くイメージが上達してるんだよ。」

「早く食べようぜ。」

「うん、食べよう。」

キューイ

「ほり、白竜」

ベリーの実を白竜に近づけると…

キュー?

スンスン

匂いを嗅いで…

キューイ

パク

ゴクリ

「早っ」

一口かよ…でも面白れえ

よーし、次はランブルの実を 4つ白竜の所に浮かせるスンスン

匂いを嗅いで…

キラーン

白竜の目が一瞬光つた気がしたその瞬間に…

パクパク

ゴクリ

パクパク

「クリ

「早えー

よーし、次は…

「真哉は食べないの?」

「うん?俺は今腹が一杯でさ」

ファングでグローブを見ちまたからな。

「そ、うなんだ…でも後でお腹がすくと大変だから何個か取つて置く  
んだよ。」

シルフィーは優しいんだな「ありがとう。」

「いえいえ、だけど後で絶対食べるんだよ。  
村や、町に行くと思うから…

「おう」

移動中に食べるか。

## 1-1話（後書き）

一週間に一回は更新出来ると思います。

## 1-2話（前書き）

前回より短いです

おかしい、白竜は10k以上食つてる筈なのになんで…  
「腹が膨らんでねえーんだよ。」

「い、いきなりどうしたんだよ?」

シルフィーが驚きながら俺に聞いて来た。

「いや、あの小さな体の何処にあの量が入るのかなって思つても。  
30?の体に10kも入るのか?」

「確かドラゴンは、食べた物で体力回復したり、魔力に変換するか  
ら満腹になる事は少ないんだよ。」

「へえドラゴンって便利な体なんだな。  
教えてくれてありがとな。」

「いえいえ、分から無い事があつたら何でも聞くんだよ?」  
シルフィーは俺に向かつてそう言つてくれた。

「おう」

シルフィーに頼つてばかりだな俺は…

「シルフィー食べ終わつたか?」

「うん、食べ終わつたんだよ。」

「これからどうする?」

「うーん…村に行つて見るんだよ。」

村か…何が有るのか楽しみだな。

「此処から遠いのか?」

「此処からだと…歩いて3日は掛かるんだよ。」

予想以上に遠いな…

「それに私は人間に会いたく無いから…」

シルフィーの体が光り始めだんだん小さく光りの球体になっていき…

「首飾り?」

真哉の目の前には鳥の形がかたどられた首飾りがあった。  
(人間に気付かれ難いからこれを着けるんだよ)

「ああ、だけどこの頭に響く声なんとかならないか?」

「この状態だと、これしか出来ないんだよ、『ごめんね。』」

「いや、大丈夫。」

慣れれば大丈夫だろ。

(あと、私に伝えたい言葉を思えば伝わるんだよ。)

それはありがたい、人前でぶつぶつ言つてたら変な目で見られるからな。じゃあ伝わるか試して見るか。

(シルフィー聞こえるか?)

(ちゃんと聞こえるんだよ。) 「これから村に行きたい所だが…

「白龍どうするか?」

(白龍に聞くのが早いんだよ。)

「白龍つて喋るのか?」

(喋らないけど、理解は出来るんだよ。)

成る程、俺が質問して首を振って貰えれば良いって事だな。

「なあ白竜」

キューイ?

「俺達は旅をするんだが…一緒に行くか?」

キューイ

白竜は迷わず首を縦に振った。

「よろしくな、白竜」

キューイ

白竜が真哉に飛び込んで…ペロペロ

真哉の顔を舐めた。

「おー、よしよし」

(白竜って真哉に随分なついているんだよ)

「俺は大した事はしてないぜ。」

(私が治せなかつた傷を一瞬で治したんだから大した事だと、私は思つんだよ。)

「そなのか?俺はただ、治つて欲しいって思つたら、出来ただけのまぐれだぜ?」

(やうだよ、例えまぐれだとしても出来たんだから大した事なんだよ)

「まあ、ありがとな」

(こえいえ)

「そろそろ行くとするか」

キューイ

「おつと、危ないぞ」

白竜が真哉の頭に飛び乗った。

キューイ

「次からは氣おつけるんだぞ？」

キューイ

(真哉つてお父さんみたいだね)

お父やんか…

「白竜に親は居ないのか？」(分からぬ)、だけビ竜は青年になつたら親を離れて暮らす筈なんだけビ…)  
と云つ事は、この白竜に親は居ないのか…

「俺がお前の親になつてやる」

キューイ

真哉は白竜の両脇を手で持ち上げながら叫んだ。

「先ずは、お前を考へよ。」(どんなお前を考へるんだよ?)

(随分安直な名前なんだよ)  
「つーん、やつぱりシロだね?」

(俺もそう思つが…)

「簡単で覚え易いだろ?」

(やうだけど…白竜に聞いた方が良いんだよ?)

「そうだな」

「白竜

キュ?

「白竜… 今日からお前の名前はシロだ」

キュイ

「シロに名前が付いた事だし、村に行くぞ。」

（村に行くんなら、シロを隠した方が良いんだよ。）

「何で?」

（竜は赤ちゃんでも△ランクなんだよ。）

「そうだつた、どうすれば… そうだイメージで俺達以外見れなくすれば大丈夫な筈…」

「シルフィー、その首飾り状態でも外は見れるのか?」

（見れるんだよ）

シルフィーで試して見るか「シルフィー、シロを見ててくれ」

（分かつたんだよ）

シロが透明で俺以外見れないようイメージ

（ま、真哉シロがいきなり消えたんだよ。）

俺はシロが見えるからイメージは成功したな

「シロが田の前に居るやつへ..

(えつ居ないよ。)

イメージ解除

(あれ? シロが見えたよ、どうしたつ事?)

「村に白竜が来たら混乱するだろ?」

(うそ、竜は赤ちゃんと村を壊せるんだよ)

「それで、シルフィーで試せた。」

(やうなんだ、でもこれでシロも村に入れるね)

「ああ、やうだな」

## 1-2話（後書き）

読んで下せりてあらがとうござります。

## 1-3話（前書き）

ギリギリ間に合いました。  
相変わらずの文才ですが、読んでくれると嬉しいです。

「シルフイー、今からシロを俺達以外には見えない様にするから見えなかつたら、言ってくれ」  
(分かつたんだよ)

シロが透明で俺達以外見れないようイメージ

俺は見えるが…

「見えるか？」  
(見えるんだよ)  
大丈夫だよ…な

「シロ、俺の頭に乗つてくれ」  
キュイ

「走るからしつかり掴まるんだぞ？」

キューイ  
「シルフイー、道案内頼むぞ」  
(任せるんだよ)

「どの方向に向かえば良いんだ？」  
(ずっと真っ直ぐに行けば着くんだよ)

「俺が今向いてる方向に行けば良いんだな？」  
(そうだよ)

「分かつた、ありがとう。」

(いえいえ)

俺が向いてる方向を真っ直ぐで、迷わない為には..  
「太陽が右側に有ることが目印だな。」  
(どうしたんだよ?)

「いや、何でもない。」

(じゃあ、急ぐんだよ)

「おう」

序でにファングの毛皮持つて行くか。

走つて10分後..

異世界に来て身体能力が上がつたのは、木の実を取りに行つた時に  
分かつたが..  
俺にこんな脚力無い筈だ、それに、俺的にはジョギング程度の力し  
か出してないが...電車並に速い。

(ま、真哉)

ジョギングでこんなに速いって事は..

(真哉、危ないんだよ!!)

「えつ?」

やべつ、止まらねえ

真哉の目の前には巨大な木があつた。

くつ

俺は咄嗟に腕で顔を守つた瞬間..

ドゴーンツツ

暗いな、俺どうなつたんだ?

（真哉大丈夫？）

（ああ、大丈夫だが、木にぶつかつた後どうなつた？）木にぶつかつたのは分かるが、何故暗いんだ？

（大丈夫なら良かつたんだよ。今真哉は木に埋まってるんだよ。）

木に埋まるつて聞いた事ないぞ

（そ、そうか教えてくれてありがとう。）

（いえいえ。でもどうやって出るの？）

石の力を使えば出れるが、石の力は出来るだけ切り札として使いたいから…

（シルフィー、魔力の使い方を教えてくれ。）

（今から魔力を流すんだよ）

（いや、教えてくれれば自分でやるぞ？）

（教えただけじゃ使えないんだよ。）

（何故だ？）

（魔力を他人から流して貰わないと、絶対に気づけないんだよ。例え賢者や帝でもね。）

（うなのか…）

（シルフィー、魔力流して貰つて良いか？）

（良いんだよ。あと、魔力を辿つて核を見つけるんだよ。）

（核？）

（核つて何だ？）

(魔力を辿れば分かるんだよ。)

(今から魔力を流すんだよ?)

(おう)

シルフィーから、魔力が流れて来るのは分かるが…（少し気持ち悪いな。）

（自分の魔力とは、違うからね。体が拒絶してるんだよ。）  
成る程、ゲームや漫画みたいには、ならないんだな。

（核は見つかった?）

（一様見つけたが…）

（核つて1人何個あるんだ?）

（一個しか持てないけど、どうしたんだよ?）

（いや、何でもない。）

見当つくが、俺には核が2つあった。俺の半分位の光りの玉と…かなり巨大な光りの玉があった。例えるなら、野球ボールと空位の違いがある。野球ボールが俺の元々の魔力で、空位のが変な石のだろう。

（核の大きさで魔力が決まるのか?）

（そうだよ、大きさは最大で人間位だよ。）

最大でつて事は、賢者や帝が人間位の大きさだから、俺はその半分か…

（俺も結構魔力あるんだな）（でも、真哉はイメージが使えるから魔力は無限だよ?）

そうだった、まあ自分の魔力が分かつたし良しとするか。

（魔力をイメージと同じように集めれば良いのか？）

（そうだよ。あと魔力に色を付けるとイメージしやすいんだよ）

確かにイメージしやすいが…色は…青で良いだろ。

右手、左手に青い魔力が集まるイメージ

（青い魔力にしたの？）

（ああ、イメージがしやすいと思つたからな）

本当はゲームに出て来たのを見たから、イメージ出来ただけなんだよな。

俺的には、ただ纏つっているだけだと思つが…

（これで大丈夫なのか？）

（まだ魔力が荒いけど、それでも力が倍近く上がるんだよ）

纏つっているだけで倍近く上がるって凄いな。

そろそろ、此処から出るか。

力が倍近く上がつても、きついな。

ギシギシ

もう少し

「つ！！」

バギバギ

「はあ…はあ  
で、出れたー。」

真哉はその場に胡座で座った瞬間…

キューイ

シロが畠に涙を溜めながら真哉に飛び込んだ。

「おー、シロ大丈夫だつたか？」

キュイキュイキューイ

シロは涙を堪えながら真哉に抱き付いた。  
何を言つてゐるか分からんが…

「心配掛けた悪かった。」

俺はシロの頭を撫でながら言つた。

キュー…イ

寝ちまたか…

「本当に悪かつたな。」

寝てゐるシロの頭を撫でながら謝つた。

それと…

「シルフィー、悪かつた。」俺は首飾りを優しく握りながら言つた。  
(私は大丈夫だけど…あんまり心配を掛けちゃ駄目なんだよ。)

「そうだな  
(じゃあ、改めて村に行くんだよ。)

「おー」

走つて一時間後…

「腹減らないか？」

（確かに、お腹が減つたんだよ）

キューイ

「じゃあ皆で…」

うん？

「どうしたんだよ？」

シルフィーが首飾りから妖精に戻りながら俺に聞いて来た。

「ちょっと静かに」

俺は口に人差し指を当てながら周りを静かにさせる。サー

音は小さいが水の流れる音がする

「近くに水の流れる音がする。」

「えっ？ うーん… 聞こえないんだよ？」

キューイ？

サー

「確かに聞こえる。」

「ちちだ」

「あつ待つてよー」

キューイ

走つて5分後…

あつた。水の音を出していたのは…

「滝だつたのか。」

「ま、真哉～速いんだよ～。」 キュ～イ

「わ、悪い。」

釣りが趣味だから、水の流れる音が聞こえたから、ついはしゃいじ  
まつたぜ

「釣りをしても良いか？」

「良いけど、道具が無いんだよ？」

確かに、竿は木の棒で、糸は…蔓で良いが…  
「針をどうすれば…」

キューイ

シロが俺に何かを差し出した。

これは…

「石か？」

石で何が… どうか、大昔は石を削つて石の針を作つてたな。写真で  
も見た事あるから、もしかしたら作れるかもしれない。

「シロ、ありがとつ

キュ～イ

「風よ」

右手の人差し指に風を集めて鋭いナイフをイメージ

石を左手で持つて右手の人差し指で削つていく。

30分後…

やつと石の針が出来た。  
隣を見ると…

「し、失敗は成功のもと」

「失敗し過ぎなんだよ。」

キュイ

そこには、約50個の失敗作があつた。

「出来れば良いんだ。」

さて、木の棒に蔓を巻いて、蔓に針を付けて針にエサ…を…

「エサがねえ」

忘れてた。エサが無いと魚が来ないぞ。

「探すか」

石の裏とかにいるだろ。

30分後…

石の裏を探しても見つからず滝壺の近くに行くと…直ぐに貝類が見つかりました。

「俺の苦労は一体…」

「だ、大丈夫？」

シルフィーが心配そうに俺に聞いて來た。

「ああ、大丈夫だ」  
まあ見つかったし、良しとするか。

「よし、じゃあ釣りを再開するが……シルフィー達はどうする。」

「私は見てるんだよ。」

キューイ

シロは眠ねりだな。

「やうが、見ると退屈だらうから眠かつたら寝てて良いで。毛皮を持つてきたから」

「うん、ありがとう。でも少しだけ見てる。」「了解  
石の針に貝を付けて……

「どう」

チャポン

これで魚が食い付くまでじつと堪え……

ググー

「早う」

引かないと……

もの凄く……お、重い

プチン

「……う、嘘だろ」

苦労して作った石の針が。

3分後…

意外にも石の針を直ぐに作る事が出来た。

「もう一度挑戦だ。」

針にエサを付けて…

「うー

チャポン

「今度こそ釣つてやる。」

ググー

来たこの重さは、さつきの奴だ。

ググー

少し泳がせて、疲れた所で…一気に釣り上げる

10分後…

蔓がボロボロだ。そろそろ釣り上げないと、やばいな。  
グツ

今がチャンス

「おおおおおおおお

ザッパン

来たー。やつたぜ。

これは…

「結構でけえな。」

70?つて所か。

3時間後：

「いやー大漁、大漁。」

初めて釣り上げてから、釣れる、釣れる。途中で大きめの葉っぱの籠を2つ作つたが、2つとも籠一杯になつた。

「シロ、シルフィー起きてくれ。」

「う、うん? どうしたんだよ?」  
キューイ?

「待たせて悪かった。今から飯にするから来てくれ。」

「やつたー、ご飯だー」

キューイ

シルフィーとシロは喜びながら俺に付いてきた。

「シルフィー、そこにある薪に火を付けてくれ。俺は魚を捌くから。」

「

キューイ

「シロどうした?」

キュキュイキューイ

言葉は相変わらず分からぬが、シロがジェスチャーしてゐるから大体分かつた。

シロが自分の口を指差して次に薪を指差したって事は…

「ブレスで火を付けてくれるのか？」

キューイ

呟つていたようだ。

「じゃあシロ、頼むぜ?」

キューイ

シロが返事をして、早速翼で飛び薪に向かって行き…キューイ  
口からブレスを吐いた。

「凄えな」

例えるなら火炎放射機だな。つて…

「燃やし過ぎだー！」

キュッ

俺が大声を出したらシロがびっくりして、ブレスを止めた。

俺が薪の所に行くと…

「見事な灰になってるな。」キューイ

シロが申し訳なさそうに頭を下げている

「大丈夫だつて、次は火を少しだけ付けるんだぞ?」

シロの頭を撫でながら言った。

キューイ

よし、じゃあ…

「シルフィー、シロと一緒に薪を拾つて来てくれ。」

「分かつたんだよ。」キューイ

シルフィーは羽で、シロは翼で飛んで行つた。

さてと…

「俺は魚を捌くとするか。」

右手人差し指に鋭い包丁をイメージした風を纏わせる。

先ず魚の頭を切り落とし、腹を切つて内臓を取り魚の中を水で洗つて綺麗にしていく。

魚の見た目は酷いが…

「結構綺麗な白身だな。」

綺麗な白身だし、刺身にしてみよう。

30分後：

ちょっと拘り過ぎたか？

白身の薔薇が6つ咲いていた。

「まあ1人2つで良いだろ。」次は…味氣無いと思つが普通に火で焼くか？

「真哉ー、薪を持って来たんだよー」  
キューイ

おつ丁度良い所に来た。

結構持つて来たな…

「早速で悪いがシロ、薪に火を付けてくれるか?」  
キュイ

シロが頷き…

キュウ

小さい火を吐いて、薪に火を付けた。

「偉いぞシロ」

キューイ

「シロとシルフィーは、先に食べて良いぞ。」

「真哉は?」

「魚焼いてるから焼き終わったら食べるよ。後、食べるのは2つまでだ。」

「分かつたんだよ。食べ物は何処にあるんだよ?」

キュイ

「そこにあるぞ。」

俺は指差して刺身のある場所を示した。

「わー、凄いんだよ。真哉は本当に器用なんだよ。」

「ありがとう。まあ食ってくれ。」

「何か勿体ないけど… いただきます。」

キューイ

じゃあ俺は焼くとするか。

予め綺麗にしていた魚に木の枝を口から入れて、火から少し離れた

土に木の枝を刺す。

火を囲う様に8匹ほど繰り返す。

「焼けるまで暇だな。」

そうだ、木の実でも食べるか。

ベリーの実を剥いて…

「いただきます。」

シャリツシャリツ

「美味しい。」

「真哉」

「うん?…どうした?」

「これ持つて来たんだよ。」

刺身か…

「ありがとな」

「いえいえ」

「いただきます。」

おつ意外とさつぱりしてて、臭みも少ない。

「美味しい。」

「なあシルフィー」

「うん？」

「あの魚の量どうすれば良い？」

腐つたら勿体ないしな。

「うーん…火の魔法で薰製とかは？」

成る程薰製か…

「薰製も良いんだが…魔法で軽くしても魚と果物もあるから持ちきれないぞ？」

俺が力持ちでも手が足りないしな。どうすれば…

「うーん…空間に入れる事は出来るが…」

生物になると時間が経つと腐ってしまう。うん？時間？… そつか時間止められれば出来る可能性があるぞ。

「シルフィー、少し離れててくれ。」

「分かつたんだよ。」

1m位の黒い空間を田の前に作り、空間の中は時間が進まないのをイメージ。

出来たな。時間が止まるか不安だが…  
「取り敢えず魚を入れるか。」

「シルフィー、魚が焼けたら食べてて良いぞ。」

「分かつたけど、終わつたら真哉も食べるんだよ?」

「ああ、分かつてる。」

魚を入れるのは良いんだが、後々他の物を入れる事になると思うから空間の中が分かりやすいと良いんだけど…

「真哉、大丈夫?」

「何でだ?」

「凄く険しい顔してたから大丈夫かなって思つたんだよ。」

「大丈夫だ。ただ考え方事が解決出来なくてな。」  
シルフィーに聞いて見るか。

「私に話して欲しいんだよ。もしかしたら、分かるかも知れないんだよ?」

確かに、それじゃあ…

「分かりやすいつて、どんな風に例える?」

「分かりやすいか…うーん説明じゃ駄目?」

「もつと具体的な例えは無いか?」

「うーん…本は駄目?」

「それだ！」

そうだ、本ならページを捲つて何があるのか、どの位あるのかが分かるぞ。

「ありがとうシルフィー、シルフィーのお蔭で解決出来たよ。」

「いやー、まぐれなんだよ。」

「それでも、解決出来た。本当にありがとう。」

「いえいえ」

早速試したいが…本が無い。魔力で代用出来るか？試して見るか。

先ず青い本をイメージ。

透けているが…

「ちゃんと持てるぞ。」

「真哉つて、イメージが本当に得意なんだよ。私もイメージは得意な方なんだけど、そういう物は作った事も見た事も無いんだよ。」

「ありがとな。」

見た事無いって事は…名前作つても良いくんじゃね？

「いえいえ。」

まあ俺は、魔本とするか。

魔力で本を作つたから、略して魔本。

魔本と空間を繋げて、空間の中に入った物は、本に載つていいくのをイメージ。

「シルフィー」

「何？」

「イメージした魔法つて、言葉で発動出来ないか？」

「言葉で発動させた者も居たけど、イメージ無しで完璧に言葉で発動した者は、たった一人なんだよ。それに、イメージが基本だから忘れると発動しない事もあるんだよ？」

「ああ、教えてくれてありがとう」

完璧に発動させた者が気になるが、今は空間の事だけを集中しよう

「いえいえ」

それに、発動した者が居るんなら試す価値はあるな。まあ物は試しだ

「空間よ開け」

あれ？

本当にイメージを忘れると発動しない見たいだな

「空間よ開け。」

目の前に1mの空間をイメージ

ブーン

機会の稼働した音を発しながら黒い空間が出現した。

「これで、少しば短縮出来る。戦闘に隙は命取りだからな」そこには、イメージした通りの空間があつた

言葉で使える事も分かつたし、後は練習だな

「一回休憩した方が良いんだよ？」

「そうだな。」

飯にして、少し休むか。

真哉がシロの所に戻ると… キューイ  
シロが真哉に飛び込んで来た。

「おつと。

遅くなつて悪かつたな。」 キューイ

うん？魚が減つてない。

「シロ、飯食つてなかつたのか？」

キューイ

「待つてくれて、ありがとな。」

キューイ

3人は焼き魚の近くに座り…

「いただきます。」

「いただきまーす。」

キューイ

30分後…

「『』がそつをまでした。」

「うるせえわ。」

キューイ

食べ終わつたし、再開するか。

魔本をイメージ。

次に魔本と空間を繋げて、空間の中に入つた物は、魔本に載つていいのをイメージ。

「シルフィー、シロ来てくれ。」

「どうしたんだよ？」

キューイ？

「俺は魚を入れるから、木の実とかをこの空間に入れるのを手伝ってくれ。」

「分かつたんだよ。」

キューイ

「まずは魚を籠」と空間に入れる。

魔本を見ると…

スー

文字が浮かんできた。

「凄えちゃんと量まで書いてある。」

そこには、魚類20kと書いてあつた。

「シルフィー、シロ入れてくれ。」

「シロ行くよ、セーの。」キューイ

シルフィーとシロで持ち上げて空間に入れていった。

魔本には…

スー

木の実類15k、キノコ類4k、蜜1k、薬草10枚と新たに文字  
が浮かんできた。

「手伝ってくれてありがとう。」

「良いんだよ。」

キューイ

村に向かいたい所だが…

「空が暗いな。今夜は此処で寝よう。」

「じゃあ、私は寝るよ?」

「ああ、悪いな予定を変えて」

「大丈夫だよ。私は真哉に着いていくから。」

本当にシルフィーは優しいな  
「ありがと。お休み。」

「お休み。」

「俺も寝よう。」  
明日は村に行くか。

読みで「つありがといひ」れこました。

前回よりかなり短いです。

チュンチュン  
パサパサ

うん?

「朝か」

うーん…はあ

俺は、体を伸ばしながら起きた

まだ薄暗いな

「皆が起きるまで、時間はあるから何をして時間を潰そうか  
うーん…魔法や魔力の事を整理するか

先ず、魔法は2つある

者が使うイメージ。人間が使う呪文

者のイメージは、頭の良い者か、上位の者しか使えないらしい

俺が思うにイメージとは、自分が心の中でえがいた物、物の形や姿  
だったが…

この世界では、心の中でえがいた魔法を発動する。

因みに者は、人間を嫌っている

次に人間の魔法は、呪文と言つて魔力を持つていれば、使えるらしい  
俺の仮説だが呪文とは、魔法を発動するに必要な言葉に魔力を交ぜ  
たもの。

因みに強さに例えると…

イメージ9割、呪文1割らしい

大体の所は合ってると思つ

「木の棒は無いかな?」

試したい事があるから欲しいんだが…

「無いな」

仕方ない、木を折つて作るしかないな

皆が寝てるから五月蠅くは出来ないから、少し離れた所に行こう

歩いて5分後…

此処らで良いだろ

木の棒つと、おつ一度良さそつなのがあった。  
結構高いがこの身体能力なら…

「ジャンプで届くか?」

5㍍ってとこだな

よし、じゃあ

「行くぜ」

ダンッ

真哉は木の棒に向かつてジャンプして…

「取れた」

取れたが…

これって…

「跳びすぎじゃね?」

真哉は10m以上跳んでいた

「マジかよーー」

真哉は叫びながら、落ちていったが…

ドンッ

音だけで怪我もする事無く着地した

「怪我は無いが…」

自分の体なのに驚かされるぜ

まあ無事?木の棒が手に入つた事だし、早速試して見るか

先ず木の棒を丸い棒になるまで風のナイフで削つていぐ

20分後…

「不恰好だが、出来たな」

俺が試したかつたのは、手にしている物を魔法や魔力で強化出来るか、どうかを試したかつた

「先ずは、魔力で試してみよう」

俺の魔力を木の棒に纏わせるイメージ

うーん…

「出来たが…これじゃあ魔力を無駄に消費してる様に見えるな」

木の棒は荒々しい青い魔力を纏っていた

「今度はもう少し具体的にイメージしてみるか

木の棒の表面に魔力を薄く張り棒の中に魔力を詰めるイメージ  
例えるなら鉄パイプの中に鉄を詰める感じ

「これを…」

真哉は木の棒を木に向かって片手で振った。

ドゴッ

「威力凄えな」

木が木の棒で半分以上めり込んでいた

まあ強化は出来たから…

「後は発動の練習を繰り返して、言葉で発動出来る様にするか

5分後…

「魔力強化」

出来た。イメージなら直ぐに出来たが…言葉にするのは少し難しいな  
魔力強化でコツを掴んだから、次は属性で強化をして見よう

30分後…

属性も出来たが魔力強化より難しいな。取り敢えず日も昇ってきた

から皆の所に戻りながら結果を考えるか先ず火の属性で強化すると木の棒が若干赤くなり、物に触れると燃えた

水の属性で強化すると木の棒が若干青くなり、水の膜を張った

土の属性で強化すると木の棒が若干茶色になり、土を纏つた

風の属性で強化すると木の棒が若干緑色になり、風を纏つた  
今はこの段階だが、もっと練習すれば進化する

真哉は確信しながら皆の所に戻つて行つた

読んで下さりありがとうございました。

## 1-5語（複数形）

“ギツギツ”間に似こもった

おつシロは寝て居るが、シルフィーは起きてるな。

「真哉、おはよう

「ああ、おはよう

「とこりで、真哉は何処に行っていたんだよ？」

「魔力の練習に行つてた」

「へえ、どうゆう練習なんだよ？」

「手にした物を強くするから…強化…かな」

「強化出来たの？」

「出来るぜ…ほら」

俺は手にしていた木の棒に魔力を纏わせた

「凄ーい、強化するのは熟練者でも難しいのに。強化以外で他に練習したの？」

「いや、してない」

魔力を消しながら答えた

「そつなんだ。まあお疲れ様だよ

「ああ。とこりで、腹減らね？」

「うん、お腹空いたんだよ」

「よし、じゃあ飯にするか」「シロばどりすのんだよ?」

「飯が出来たら起こす」

それか、匂いに誘われて起きるだろ

「分かつたんだよ」

魔本を出して確認…魚を5ドウ出せば良いだろ

「空間よ開け」

1mの空間をイメージ

ブーン

音を発しながら黒い空間が空中に現れた

先ず一匹手に取って、確かめると…

「田は濁つて無いし、まだ少し生きてる」

空間の中はイメージした通りに止まっていた

「今日は全部焼くとしよう」

魚を綺麗にする事20分後：

「出来た。シルフィー昨日の薪は残ってるか?」

「残ってるんだよ」

あれか…

「火属性強化」

自作の棒に火の属性魔力を込める

「ま、真哉、属性強化も出来るの？」

「ああ、だが魔力強化と一緒にじゃないのか？」

「全然一緒にないんだよ、イメージだつて難しいし魔力強化とは、桁違に難しいんだよ？」

構簡単と思っていたんだが…

「因みにどれくらい難しいんだ?」

「ギルドランクで例えると魔力強化はCランクからだけど、属性強化はSランクだよ？」

本当に桁違いだな。これも人前では使えないな

「真哉つて目立ちたい？」

「いや、俺はのんびり旅がしたいから目立ちたくない。それに目立つと利用されそだから

「確かに利用される可能性は高しんだよ。 しあれ私が人間を見極めてあげるんだよ。」

「確か者達は感覚で分かるって言ってたな」「ありがとう、助かるよ

「いえいえ」

火の属性で強化した棒で薪に火を付ける

「シルフィー、村まであとどのくらいある？」

「うーん…歩いて一日だけ、真哉の走りで行くと…2、30分で着くんだよ」

まあ速さが電車並だらな…あつ重要な事忘れてた

「お金つて、どうゆうの？」

「実物が無いから分かりにくこと悪いよ。」

確かにそうだが、知らないよりは、ましだろ

「教えてくれ」

「分かつたんだよ。

種類は…

銅貨、銅板、銀貨、銀板、金貨、金板、白銀貨があるんだよ。

それから

銅貨10枚で銅板1枚、銅板10枚で銀貨1枚、銀貨10枚で銀板1枚、銀板10枚で金貨1枚、金貨10枚で金板1枚、金板10枚で白銀貨1枚になるんだよ。」

「長い説明ありがと」

「いえいえ」

「因みに宿つて最低いくらで泊まれる？」

「銅板1枚かな」

成る程大体分かつた。日本円にすると銅貨＝100、銅板＝100  
0円、銀貨＝1万円、銀板＝10万円、金貨＝100万円、金板＝  
1000万円、白銀貨＝1億円だと想つ

「真哉、焼けたよ」

「ああ、ありがとう」

シルフィーが焼けた魚を真哉に渡した

スンスン  
キュー？

「どうやら、シロも起きたようだな」

「そうだね。シロ」ひたすらおこで

キューイ

皿を擦り、足をフランフランさせながらシルフィーの所に着いた

「はい、どうぞ」

キューイ

「俺達も食べよつぜ〜」

「うそ」

「いただきます」

「いただきます」キューイ

20分後…

גַּתְּהַנְּמָרָעָה

「おまえ、おめでった」

十一

「少し休んだら、村に行こう」

「うん」

十一

「 そろそろ、行こうぜ？」

תְּרִינְדָּלְגָּה

シルフィーは首飾りになり、俺は首飾りを付けた

シロを透明にして俺達以外見れないイメージ

「シロ、頭に乗つてくれ」

一乗つたな。シロ落ちない様に掴まつてろよ?..  
キューイ

30分後

おつまだ遠いが建物が見えるぞ  
「シレフイー、あれか？」

(そりだよ)

此処からは、歩いて行け（何で歩くんだよ？）

「いや、あの速さは不味いだろ?」

(確かに速すぎるけど、歩くのと関係あるの? )

「人前では、魔法を使えないふりをする」

(目立たたくないから? )

やばい状況だつたら使うがな

「ああ、悪いな我が儘で」

(大丈夫だよ)

「もし使つたとしても魔力位だけどな」

(魔力位ならあまり目立たないけど、使い過ぎると目立つんだよ? )

確かに、なら…

「魔法は使えないけど、魔力は多少使える旅人つてゆうのはどうだ?  
?」

(多少なら大丈夫かな。だけど危険な状況だつたら、私も出る)

「それはありがたいが、人間が居る時は極力出るなよ?」  
(何で?)

何でつて

「シルフィーは、人間が嫌いなんだろう?」

(嫌いだけど、真哉が傷ついて欲しくないんだよ)

涙が出そうな言葉だな

「ありがとう。じゃあ危険な時は手伝ってくれ」

出来るなら、俺が言って守りたいんだがな

(うん、任せることだよ)

「そここの君、止まりなさい」

シルフィーと話している内に村の門番に話しかけられた

や、やばい、シロが見えるのか？内心焦りながら…

「な、何ですか？」

答えた

「君は何者だ？」

君はって事は見えてない？「自分は旅人です」

「若いのに凄いな。ギルドカードは持っているか？」

見えてない様だな。怖えかなり焦つた

（シルフィー、ギルドカードって持たないと駄目なのか？）  
(大丈夫だよ。カードを持つていると見せるだけで入れるけど、持つてないと武器を預けないと入れないんだよ)

（教えてくれてありがとうございます）（いえいえ）

「ありがとうございます。ギルドカードは持つて無いです」

「そうか。では、武器を預かるつ

棒つて武器に入るのか？

「どうぞ」

「い、これだけか？」

「はい。ファングと戦つた時に剣を折つてしまつて」

「成る程、それは大変だったな。村の入つた右の方に武器屋がある、  
滯在するなら預かるようだがそこで毛皮と武器を交換して貰いなさい」

「門番は村の右の方に指差しながら言った

「はい、教えてくれてありがとうございます」  
真哉は頭を下げながら言った

「おひ

村に入つて…

「あつこんにちは  
木造の家しかないな。時代的には中世位だな…  
「こんにちは」

「あつこんにちは  
村の人々も氣さくに話してくれるし良い村だ

「おつこれが武器屋だな」そこには、剣の形に彫られた木の板が飾つてあり、中には武器が沢山並べてあった

早速入つて見よ

「少し見ただけだが…  
「何か凄いな」

本とかで見た事はあるが、実物を見るのは初めてだなうん? 誰かが俺に近づいてくる

「探し物は見つかったか?」

「いえ、まだ見つかりません」

真哉は後ろ向くと、

「何だ? 俺の顔に何か付いてるのか?」

無精髭を生やし、左目に傷が付いた男が立っていた

「付いてませんよ。此処の亭主さんですか?」

「ああ。此処の村の武器屋をやつてるガンテルってんだ、まあ宜しくな」

「はい。自分は田崎真哉です、真哉と呼んで下せー」

「おー、宜しく」

ガンテルは真哉に右手を差し出した

「宜しくお願ひします」

真哉はガンテルの右手を握った

「で、何を探してるんだ?」

「あつその前に毛皮と武器を交換出来ますか?」

門番の人は出来るつて言つてたけど、大丈夫か?

「出来るわ。じゃあ毛皮を見せてくれ」

良かつたあ

「どうぞ」

「ふむ……見た所傷も無し、質も良い。そつだなあ銀貨5枚までなら、武器と交換するぞ」

銀貨5枚つて事は…5万！想像以上に高えな

「ありがとうございます。早速選んで良いですか？」

「ああ。ゆつくり選んでこい」

「はい」結構種類があるんだな。専門知識が無いから細かい所は分からんが、分かる物は…大剣、槍、ナイフ、片手剣、弓、ハンマー位で、後は槍に斧がくつついた物だつたり、棒の先端にクリスタルが付いてる物だつたり、細い剣とか分からぬ物があつた

「うーん…」れとこれで良いかな

「決まったのか？」

「はい。これとこれを交換して下さい」

「槍とナイフ2本か…良いぞ後少し待つてろ」

「ありがとうございます」何だろ？

改めて見るところの槍とナイフって両刃か。それに本物つて何かずつしりくるな

「待たせたな」

「全然待つてないですよ」

「これをやるよ」

ガンデルが真哉に何かを投げた

「何ですかこれ？」

ベルトに少し似ているが違う。ベルトに小さいバックと、鞘が左右約10?20?30?と3つずつ付いていた

「それはラインと書いて、冒険者や旅人が持っているかなり便利な物だぞ」

確かに便利だな。ナイフを普通に持っていたら危険人物になりそうだし、バックも付いてるから小物も入る「ありがとうございます」

「おう。またこの村に来たら俺の所に来いよ」

「はい。ありがとうございます」

真哉はガンデルに手を振りながら武器屋から出た

武器屋を出て門番の所に向かつて数分後：

またガンデルさんに会いたいけど、いつ会えるか分からんしな。この村の名前だけでも覚えて行こう

考えている内に門番の所に着いた

「あのー、門番さん」

「うん？ おお君か、どうしたんだい？」

「此処の村の名前と近い行ける場所を教えて下さい」

「此処はカリイ村。確か…キヤロル村が此処から近い筈だ」

カリイ村か。いつかまた来たいな

「分かりました。教えてくれてありが…」

カンカンカンカン

何だ？

「何の音ですか？」

「これは、あそこの高台に居る人が魔物が来た事を知らせる音だ」  
門番の人が村の中央の方を指を差しながら説明してくれた

あれか… 大体2、30㍍って所だな

「君は下がつていなさい」

俺は見えてきた

「大丈夫ですよ、自分も戦えますから」

交換した槍を構えながら言つた

ファングか…いや、違うな周りにファングも居るが先頭に居る奴は  
周りのファングよりでかい

「しかし君はまだ子供…」

「来ますよ？」

「くつ怪我はするなよ」

門番も片手剣と盾を構えた

「分かってますよ。シロ村の中へ戻してくれ」

俺は小声で言った

キューイ

でけえな

「き、キングファングだと」

（キングファングって強いのか？）

（うん、まあ初心者には手強いんだよ。因みにランクは二ランクだよ）

読んで下さりありがとうございます

## 1-6話（前書き）

誤字があつたら指摘して下さい

グルルル

(なあシルフィー、キングファングって俺を狙ってる?)

(うん、今にも攻撃して来そうだよ)

(何でだ?)

(多分だけど、仲間を殺されたから敵討ちに来たんじゃない?)

確かシロを襲つていたファングの事か

周りのファングは3匹…村の門番相手じやキングファングは無理か…

「門番さんは、周りのファングを任せても良いですか?」

キングファングだと門番は死ぬ確率が高いし、それに人が目の前で死ぬのは見たくない

「それは良いが、君はどうするんだ?」

「自分はキングファングを相手にします」

門番の死ぬ確率を少しでも減らさないとな

「な、何を言つてるんだ君は、そんなの駄目に決まつてるだろ」話して駄目なら…

「行ぐぞ」

ダツ

突つ込むしか無い

「あつ、君」

ガウ

ファングが門番を2匹で囲んだ

「はああああ

俺はキングファングに攻撃しようとして…

ガウ

「ツ！」

攻撃を止め、後ろのファングの攻撃をバク宙で避けながら…

ザクツ

「先ずは1匹目

槍でファングの頭を貫いた

「うわあああ

まずいな、門番に2匹のファングが飛び付いている。なんとか盾で防いでいるが助けないとやばいな

真哉は左右の鞘からナイフを抜き…

「おらああ

ブブンツ

両方のナイフをファングに向かって投げ…

ザクツザク

1匹目は頭に刺さり絶命。2匹目は心臓の辺りに刺さり真哉を睨んだ後に絶命した

ふう、なんとか助けられた「後はお前だけだ」  
グルルル

真哉は槍を構え…

「行くぞ！」 ダツ  
ガウツ

真哉とキングファングが同時に走り出し…

衝突する寸前にキングファングが右前足の爪で真哉に振り落として  
きたが…

「つと」

真哉は横にジャンプして避け距離をとった

「流石キングファング普通のファングより速いな」

だが…まだ見えるし行ける

ふう、よし

ダツ

真哉は再びキングファングに向かつて走り出した  
キングファングは左前足を走つてくる真哉に振り落とそうとしたが…

「今度は俺から、だ！」

槍を右前足に向かつて投げ…

ドスツ

ガツ

真哉の投げた槍がキングファングの右前足に刺さった。真哉は怯んで  
いる内に槍を直ぐに抜き眉間に槍を深く突き刺した

ガツ…ガル

ドスン

「はあ…はあ」

やべえ頭がクラクラする

「い、意識…が」

バタン

（真哉？ 真哉大丈夫！！？）

（悪いな…シルフィー。 だけど…今は、少し…休ませてくれ）  
（わ、分かつたんだよ）

（ありが…と）

真哉は意識を失った

真哉が意識を失つて数時間後：

「うつうん？」 何処だ此処は？

（真哉！ 大丈夫！？）

（ああ、大丈夫だ。悪かつたな心配かけて）  
（ううん、真哉が大丈夫なら平氣だよ）

（ありがと。後此処は何処だ？）

宿の中か？

（いえいえ。此処はガンデルの家だよ）

ガンデルさんの家か…

コンコン

「入るぞーって寝てるか」

ガンデルさんの声だ

「あつ、はい」

ドンッ

俺が返事した瞬間にドアが壊れる勢いで開きガンデルさんが入つて

来た

「お、起きたのか？怪我は無いか？」

「え、ええさつき起きた所で、怪我は無いですよ」

「良かったあ、いやー門番の野郎が走つて俺の所に来て、少年がキングファーングと戦つてるつて聞いて急いで行つて見たら真哉とキングファーングが倒れてたからびっくりしたぜ」

「すいません、心配かけてしまつて」

ガンデルさんにも心配かけまつたな

「いや、怪我が無いんなら良いんだが、真哉つて凄えな

何でだ？

「何で俺が凄いんですか？」

「だつてよ一人でキングファーングを倒しちまつんだぜ？それも無傷だから尚更凄い」

「いやー、俺に武術を教えてくれた人が良かつたんですよ」

「だとしても傷の一つや二つは出来る。だから無傷で倒せたのはお前の実力だ」

実力って言われても、この世界に来て上がった身体能力のもあるし、おじさんに武術を習つて無かつたら、いくらこの体が丈夫でも死んでたけど…

「そうなんですか？」

「ああ」

「ありがとうございます」人に認めて貰つてなんか、嬉しいな  
「後渡したい物が2つある…先ずはこれだ」

ガンデルが真哉に渡した物は…

「ローブですか？」

全身を隠せる程の布製ローブで、色は黒だな。それにしても何でロ  
ーブ？

「そつだが…説明する前に真哉は何歳だ？」

え？俺の年齢？まあ良いか「17歳です」

「何！俺は20歳位だと思っていたが…まあ良い説明の続きをしよ  
う」

なんだつたんだ？

「お願いします」

「ああ。ローブを渡したのは俺の予想以上に若かったが、その年齢  
でキングファングを倒せる奴はまず見た事、聞いた事が無いからな、  
他の奴らが聞いたら絶対にお前を利用する筈だ。」

だから年を聞いたのか。

それにしても教えて貰えて本当に良かった  
「教えてありがとうございます」

「利用されるなんて嫌だろ？それに真哉はこの村の英雄だからな

「確かに嫌ですね」

英雄？

「最後にこれを渡す」

ガンデルが真哉に渡した物は…

「皮袋？」

手のひらサイズの皮製の巾着だな

「ああ。少ないけどな」

少ない？まあとにかく開けて見よう。

皮袋の中身は…

「銀板！？しかも3枚も！」多い。俺的に30万は大金だし、全然少くないぞ

だけど何でだ？

「え、えーと…何ですか？」

「何でって、そりゃあ村を救つてくれたからだ」

村を救つた？救つた覚えが無いんだけど…

「あのー、村を救つた覚えが無いんですけど…」

「何言つてやがる、キングファンを倒したろ？」

「ええ倒しましたけど…」

それどう関係があるんだ？」

「このカリイ村には、まともに戦える奴が俺を含めて2人しか居ないんだ。例え倒せたとしても、村の7割は死んじまう。だから真哉はこの村を救つたも同然だし、英雄だ」

戦える人少なつ！。だけど

「え、英雄なんて大袈裟ですよ」

村を救つたのは良いんだが、流石に英雄は言い過ぎだと俺は思う

「そうか？」

「はい。ですから英雄は止めてください」  
俺に英雄なんて似合わないしな

「まあ真哉が嫌なら止める。悪かつたな」

「いえ、分かつて貰えたならそれで良いですよ。」  
真哉はベッドから降りながら言った

「もう動いて大丈夫なのか？」

「ええ。ベッド貸してくれてありがとうございました」

「大丈夫なら良いけどよ。次は何処に行くんだ？」

えーと、確か…

「キャロル村に行こうと思います」

「キャロル村か…確かにキャロル村の近くに鉱山があつた気がするな」

鉱山か…掘った鉄とかで武器を作つて貰えるのかな? 「鉱山で掘つた物で武器を作つて貰えたりするんですか?」

「ああ、作つて貰えるわ。それに普通に賣つより安いしな」

そうなんだ。じゃあキャロル村に着いたら宿に行つてから鉱山に行くとしよう

「教えてくれてありがとう」

「おひ。直ぐに出発するなら少し送つて行くぜ」

「ありがとうございます」 真哉はガンテルと一緒に家を出ると…

「英雄様だ」

「英雄様ー」

なんだなんだ?

「ガンテルさんどうゆひーと?..」

「あーすまん。臨に説明するから少し待つてくれ」

「お願ひします」

多分全員だが、カリイ村の人つて50人位居るんだな  
村に入った時に少し見たがこんなに居るとは思わなかつた

「説明してきたぞ」

「えつ? あ、ありがとうございます」

考えてる内に説明が終わつてたらしいな

「皆がお礼をしたいってよ」

「お礼って十分貰いましたよ?」

あんな大金貰つたしな

「他にもしたいらしいんだ」

「いや、大丈夫ですよ」

「それを皆の前で言えるか?」

「うう

言こづらー

「わあ、どうする?」

他にもつて、別に…あつやうだ

「じゃあ俺を見送つて貰えますか?」

図々しかつたかな?

「まあ良いが…そんなんで良いのか?」

「はい。それで十分ですよ」

「分かつた。皆にそう伝えてくる」

「じゃあ真哉気お付けてな」

「はい。ガンデルさんもお元気で」

「おう。」

結果からいつつと図々しい願いを聞いてくれた

「村の歸れどもお元氣で」

「はー」

「真哉様もお元氣で」

「村を救つて下さつて本当にあつがとうございました」

「またいつか会いましょう」

「はい。では、わよならー」

真哉は手を振りながら村を出た

読んで下せりてあつがといひざれこます

## 17話（前書き）

“ギツギツ間に合いました

村を出て5分後…

真哉は突然足を止めた  
(どうしたの?)

キュー?

「いや、村が心配でや」

戦える人は少ないし、また魔物が来たらと思うと…

(確かに、私も感覚で感じたけどあの村に悪い人は1人も居なかつたんだよ)

なら、尚更心配だな。しかしどうイメージすれば良いんだ?  
(でかい盾とかで守れれば良いんだけどね)

守る…

「それだ。」

(えつ?…どうするの)

「キングファングと戦つたる?」

(うん、でもそれと守ると関係があるの?)

「ああ。出来るか分からんが、キングファングの強さを思い出して、

キングファングより弱い魔物は入れないのをイメージする」

確かキングファングはCランクだったから結構役に立つと思つ

(なんだか凄いね)

「ああ。まあやつてみるか

(頑張つて)

「ひむ

キングファングより弱い魔物は入れない透明の壁を村全体にイメージ

「凄え、透明だけど、壁が出来てるのが分かる」

村を囲う半円形の透明の壁が出来ていた

(これで少しは安心だね?)

「確かにそうだな。じゃあキャロル村に行こう  
本当ならもつと強い壁をイメージしたかったがな

(うん)

キュー

ガンテルさんの話だと、キャロル村は確かにこの道を真っ直ぐ進んで行けば着くって言つてたな

「これつて道と言えるのか?」

(まあ田舎だからね。街や王国に行けば石畳で道が作つてあるよ)

「そ、そつか  
そつゆひ事じやないんだが…まあ中世位の時代にアスファルトは無い  
いか

「とにかくキャロル村に行こう」

周りが雑草だけで、剥き出しの地面が道でも着ければ良い

(うん)  
キュイ

序でにローブでも羽織つとくとしよう

(もう着るの?)

「ああ。何時でも顔を隠せる様にな

キュ?

(真哉つて本当に目立つのが嫌いなんだね)

「まあな。それに人間つてのは、利用するだけ利用して捨てるつて

奴も居るしな」

だから容易に目立つ事はしたくない

(人間つて恐いね)

「確かにそうだが、今のは悪い奴の例えで、良い奴も居るから

俺が思うに…お人好しとかキュ…

(そうなの?)

「まあ、そうゆう奴等も居るつて事だ。分かったか?」

(うん。分かったんだよ)

キューイ

ガブツ!

シロは真哉の頭に噛み付いた

「いてええええ

シロが吼えた瞬間頭に急な激痛が襲つた。俺は頭を押さえながら、イメージで痛みを消す

「ど、どうしたんだシロ?」あーびっくりしたし、凄え痛かつた

キュキュイキュイ

やはり言葉は分からぬが、シロがある方向を小さい手で差している

「何がある…」

うん？結構遠いが馬車の後ろを人が武器を持ちながら追つているのが見える

（真哉あれば盗賊だよ…）

「何つ！？」

だから武器を持つてゐるのかあの馬車が危ないな…

「助けるぞ。シロは木の陰に隠れていてくれ」

キュイ

（真哉大丈夫なの？）

走つてゐる途中シルフィーが聞いてきた

「何がだ？」

（真哉は怖いんじよ？）

「ああ、正直かなり怖い。今でも間違つて人を殺したらつて思うと、何かに押し潰されそうだ」

この世界に来てある程度は覚悟してゐたが、俺には人を殺す覚悟が今は無い…だが何時かは覚悟する必要がある

（そうだよね）

「何で分かつたんだ？」

（真哉だつたら盗賊に絶対に勝てるけど、手が震えてる。それに真哉は魔物を倒した時に罪悪感を感じる優しい人だから）

俺を買い被り過ぎだな。手が震えてるの気付いてたのか…優しいのかは分からぬ。だが例え魔物が人間、者の共通の敵だとしても生

きてるのを殺すのは罪悪感を感じる

(私は真哉に無理をしてほしくないんだよ。私は仲間なんだから何時でも頼つて欲しいんだよ)

「はあ」

(私じゃ、頼りない?)

「いや、違うんだ。こんな近くに頼れる存在が居るのに、何で気付かなかつたんだつて思つてさ」

本当に何でだらうな

(私は他者、他人から見て頼れる存在かは分からぬ。だけど、真哉の頼れる存在にはなりたい)

「他の奴等なんて関係無い。俺はシルフィーが頼れる存在だと今だが、やつと分かつた…もし俺が壊れそうになつたら頼つても良いか?」

(勿論だよ。私は何時までも真哉の味方だから)

「ありがとう」

初めてだな。こんな短時間で、誰かに頼るつて言葉使つたのは  
(いえいえ…本当に無理だけはしないでね?)

「ああ」

無理は出来るだけしない様にしないとな。それとシルフィーにあまり心配させない為にも、多少しか効果はないだらうが覚悟も必要だな

「あと少しだ」

(無理しない程度に頑張つてね)

「ああ。分かつてる」

バギイツ

なんだ？

「マジかよ。」

盗賊の野郎、斧を投げて馬車の片輪壊しやがつて…こつちは覚悟を決めたばかりだぞ

行くしかないな。ロープで全身を隠し…

「すーはー」

深呼吸をして…よし、先ずはジャンプして馬車と盗賊の間に入つて、盗賊と戦おう

「ツ」

真哉は足に力を入れ勢いよく飛び出し…

「誰だ、てめえ？」

上手く馬車と盗賊の間に入り込んだ

誰だつて言われても…

「通りすがりの旅人だ」

盗賊の数は…5人か

「ギヤハハハ…お前正義の味方のつもりか？」

盗賊の先頭の奴が喋つた

「こいつ頭大丈夫か？」

「旅人と言つた筈だが？」

「俺らが襲うとしている奴を助けるんなら一緒にだ」

一緒にじゃない気がするのは俺だけか?  
(私は一緒にない気がするんだよ)

(もうだよな?)

良かった。シルフィーは俺と同じ事を考えていたようだ  
(うん)

「まあ良い。楽しみが増えたからな」

楽しみ?…どうゆう事だ?

「お前らは金が目当てじゃないのか?」

「それもあるが…俺は殺すのが一番楽しみなんだよ」ギリッ  
こいつ…

(真哉!、怒りに任せちゃ駄目だよ)

(…ああ。悪い)

俺は覚悟の事で迷つたが…ここに覚悟は必要無いな

もう一度…

「何で言つたんだ?」

言つたら…

「聞こえなかつたか?まあ良い。俺は人を殺すのが樂し…」

殺す!…

真哉は一瞬で盗賊の先頭の奴に近づき槍を薙ぐり、首から頭を切り

落とした

「か、頭ー」

「頭が、殺された」

「ば、化け物だ」

「俺は殺されたくない」

盗賊達は我先にと逃げて行つた

(ま…)

「出るなよ、シルフィー。俺は大丈夫だから」

真哉は首飾りを優しく握りながらシルフィーに言つた

(で、でも真哉は魔物を殺した時以上に罪悪感が出てる)

「大丈夫だ。あいつじゃ なかつたら、壊れてたかもしれないけどな」

「うつ」

(真哉！)

真哉が倒れ…

「大丈夫ですか？」

る前に誰かに支えられた

「誰だ？」

「ええ、少し疲れてるだけです。休めば大丈夫ですよ」

(大丈夫だ)

「では、私の馬車で休んで下さい。貴方は私の恩人なのですから」  
て言つ事は俺が助けた馬車の人か

「分かりました。少し肩を貸して貰えますか?」

「ええ。良いですよ」

真哉は馬車の人に支えられながら馬車の中に入つた

「ありがとうございます」この馬車、外見は意外とでかいが、中は荷物が沢山あるな

「いえいえ。荷物が多くてすいません」

「いえ、大丈夫です」

「あつそうだ、少し待つて下さい」

男の人は馬車から外に出ていき…

「荷物は弄らないで下さい」外から馬車に戻り俺に注意をしてからもう一度外に出ていった

「うーん、弄るなと言わると気になる…」

大事な物か?それとも危ない物か?まあ戻つてきたら、聞いてみよつ  
「お待たせしました。これをどうぞ」

「いえ、待つてないですよ。それは何ですか?」

金属製のコップは分かるが中身が分からん

「これは「コーラル」と言う飲み物です。苦いですけど、気が休まりま

すから飲んで下さい」

「ありがとうございます」

「一ヒーみたいな色だな

「いただきます」

「苦いのは嫌いだから…」

「ええ、どうぞ」

ゴクッゴク

一気に飲む

「うつ本当に苦い」

お茶より苦い

「確かに苦いですが、少しさは気が休まる筈です」

確かに少しさは平氣になつたな

「ええ。ありがとうございます」

「ですが、私は恩人にこの位しか出来ません。私は情けなく思います」

「いやいや、十分ですよ」

「貴方が十分でも、私は納得行きません。何かありませんか?」

何かって言われても…うーん

真哉が周りを見渡す

そうだ。荷物は何か聞いてみよう

「一々良いですか?」

「ええ。良いですよ」

だけど、本当に聞いても大丈夫か?

「うーん…」

「どうしました?」

「えつ?あ、いや、荷物の事を聞いても良いですか?」 勢いで言  
つちまつたが大丈夫か?

「ええ。良いですが、その前に私の名前はセルードと申します。以  
後お見知り置きを」

セルードは右手を左胸の少し上に置き、お辞儀をした  
なんか執事みたいだな

「あつ自分は田崎真哉って言います。真哉って呼んで下さい」

真哉もお辞儀をした

「分かりました。荷物の事でしたね?」

「はい。そうですが…聞いても大丈夫なんですか?」

「ええ、大丈夫ですよ。この荷物は、私が仕えて…いる…」

黙り込んでどうしたんだ?まあ良いか。それにしても仕えているつ  
て事は…多分執事で合つてるとと思つ。

「そうですよ!」

「うおっ、びっくりした  
「どうしたんですか？」

「真哉様、領主様に会つていただけませんか？」

「領主つて事は…」

「貴族…ですか？」

「ええ。ですが私が仕えている領主様は普通の貴族とは違うんです。私達仕えている人達は家族の様に接してくれて、領内の民達には友人の様に接してくれ、優しい方なんです」

仕えているセルードさんが言うなら説得力はあるが、やはり信用は出来ないけど…

「分かりました。領主さんに会いましょう。ですがキャロル村に行つても良いですか？」

（シルフィー、その領主の所に行つたら調べてくれ  
（分かつたんだよ）

（ありがとな  
（いえいえ）

「同じ方向ですから、大丈夫ですよ」

同じ方向なら良かつた。鉱山を見てみたいからな

「では、行きましょう」

「えつ？ち、ちょっと待つてて下さい」

俺は慌てて外に出た。シロをどうやって呼べば…イメージで試して見よう

シロに俺の声が届くイメージ

「シロ聞こえるなら、直ぐに俺の所に来てくれ」

これで来なかつたら、俺が直接行くしかないな

30秒後…

聞こえなかつたかな？俺が行くし…うん？結構遠いが…

「來た」

良かつたあ。イメージ成功…

「何が來たんです？」

やべっ

シロを俺とシルフィー以外見れないイメージ

「いや、なんでもないです。セルードさんはどうして此処に？」「セルードでも良いですよ。此処に居るのは、真哉様が急に出て行つたんで」

成る程…

「いや、自分より年上なので…それと様は止めて下さい」

「では真哉さんで、これ以上は譲れません」

出来れば、さんも止めて欲しいんだが…

「分かりました」

「では、私は出発の支度をしてきますので、真哉さんも出発出来る

様でしたら、私に声をかけて下さい」

「分かりました」

セルードは真哉の返事を聞いて馬車に向かつて行つた

ふう、焦つたあ。シロは何処だ？

「シロー」

キューイ

真哉が呼んだ瞬間にシロは木の陰から飛び出し、真哉に向かつて飛んだ

「シロ、呼ぶの遅れてごめんな?」

キュキュイ

シロは頭を横に振つた

「ありがとな…それじゃ行け」

（おー）

キューイ

「セルードさん、準備出来ました  
馬つて近くで見るとでかいんだな

「そうですか。では出発するので、馬車の中に入つて下さい」

「はい…じゃあお願こします」

「はい。」

真哉達はセルードの馬車でキャロル村に向かつた

読んで下せりてあつがといひざれこます

1-8話（前書き）

前回より短いです。

(シルフイー、セルードさんに何か感じじる?)  
(悪い物は感じないけど…セルードは今真哉に感謝してるので事が  
感覚的で分かるよ)

成る程…悪い物は感じないのなら、大丈夫そうだな

「セルードさん、キャロル村まで後どの位で、着きますか?」

「もうですね…」のペースだと、後2、3時間位で着きますよ」

「…それまで、どうするかな?  
か…それまで、どうするかな?

「いえいえ…あの、聞いても良いですか?」

セルードは少し迷いながら真哉に質問した

なんだろう?

「なんですか?」

「あの…真哉さんは、二つ名持ちなんですか?」セルードは意を決して真哉に言った

なんか、セルードさんは二つ名持ちだな。それに二つ名持ちって言われても…

「どうゆう事ですか?」

(シルフイー、二つ名持ちって何だ?)

(「一つ名持ちは一つの名持ちはギルドランクS以上が持つ異名だよ。因みに一つ名持ちは中級貴族以上、上級貴族以下の権利を持つてるんだよ」)

それじゃあ、セルードさんは俺がギルドランクS以上つて勘違いしてる?

(教えてくれてありがとう) (こえいえ)

「いえ、違うんなら良いんですけど…何でそんなに強いんですか?」  
今度は違う質問を真剣に言つた

俺、石の力は出して無い筈だが…

「いや、自分で強いんですか?」

「はい。」即答ですか。多分今の俺は口が引きつっていると思つ

「何故そう言えるんですか?」

本当に何でだ? 気になる…

「少し話が長くなりますが良いですか?」

何で分かつたのか気になるし…

「大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。私は領主様に仕える前はギルドで冒険者をしていました…」

「へえ、セルードさんつて冒険者だつたんだ。全然面影が無いな

「私は、普通の人より強いと自信がありますが…」

自信があるつて事はギルドランクは、俺が思うにBかAランクかな

「真哉さんが盗賊に攻撃した瞬間が、見えなかつたんですよ。」

「俺が攻撃した瞬間？あの時は怒つててよく覚えてないんだよなあ

「見間違いじゃないですか？」

自分でも苦しい言い訳だと思うが、もしかしたら…

「いいえ、真哉さんが盗賊に攻撃する瞬間を確かにこの田で見ました。私が見えない程の速さで」

やつぱり誤魔化せないか…まいつたなあ…

（シルフィー、どうすれば良いと思う？）

（うーん…魔法使いと言うと田立つから、魔力を使つたって言えば多分大丈夫だと思うんだよ）

確かに、魔法使いだと田立つよなあ…魔力を使つたって言えば使える人も居るから大丈夫だな

（シルフィー、助かつたぜ。何度もありがとな）  
(いえいえ。役に立つたんなら良かつたよ)

本当に助かつたぜ

「どうしたんですか？まだ調子が悪いですか？」

セルードは、真哉を心配な様子で聞いてきた

「あついえ、違います。あの時の事を言つて大丈夫か、考えていましたよ」

「そうですか…違つなら良かつたです。言えないんであれば、無理

には聞きましたよ？」

「言えるんで、大丈夫ですよ…あの時は、足に魔力を込めたんですよ」

確かに魔力が扱えるランクはこだから、あまり問題は無いだろ

「魔力ですか…私は魔力を扱えないので、良く分かりませんが…魔法ではなく、魔力だけでも凄いんですね。教えて下さりありがとうございます」

セルードさんは魔力を使えないのか

「いえいえ…そうだ、良ければ領主さんの事を教えて貰つても良いですか？」

領主の事を聞ければどんな人かが少しは分かるだろ

「ええ。良いですよ。どんな事が知りたいですか？」

「つーん…では、領主さんは、どんな事を取り組んでいるんですか？」

「領主様は、リローン街での奴隸廃止に取り組んでいます」

奴隸つてこの世界にあるのかよ…領主はそれを廃止するんだから少なくとも悪人では無さそうだな。それに…

「あの、リローン街つてなんですか？」

「リローン街とは、簡単に言いますと、領主様の街です」

成る程、少しは情報が集まつたな…後は会えば分かるだろ「そうで

すか……教えてくれてありがとうございます」

「いえいえ。……もう少しでキャロル村に着きますよ」

結構話してたみたいだな

「分かりました……セルードさんは、キャロル村に着いたら何をするんですか？」

「そうですね……先ずは、馬車を預けてから、宿をとつて先に休みます。勿論真哉さんの部屋もとつておきます。真哉さんは何をしますですか？」

「自分は、一回鉱山に行つてきます。それと、部屋代を……」  
真哉は腰に付けている皮袋からお金を取り出したりすると……

「いえ、私が払つておきますよ。真哉さんは私の恩人なのですからセルードは、真哉がお金を出す前に言つた

「そう言われてもな……」

「ですが……」

「払わさせて下さる。私にはこの位しか出来ないのですから」

セルードは真剣な様子で真哉に言つた

「うーん……」

「分かりました。では、お願ひします」

「はい」

「俺達が話していると……」

「そこの馬車、止まるんだ」

門番に止められた

「はい？ 何でしょ、う？」

「ギルドカードを出せ、その後、馬車の中を調べるが良いな？」

なんか、うぜんなこの門番

「ギルドカードは出しますが、馬車の中は見せれません」

「なんだと？ 馬車の中が見せれないなら、出でこきな」

「うつ、ムカつく。」

「これを見てもですか？」

なんだ？ セルードさんが服の中から紙を出したが？

「はつ、何を見せよ、うつてんだ」

「領主様の通行許可証です」

「うつ、嘘だ」

一気に動搖したな

「では、確認を」

門番は、セルードの渡した紙を恐る恐る確認すると…  
読んでいく内に手が震え始め、顔も真っ青になり…

「ほ、本物だ… す、すいませんでした。どうか、どうか打ち首だけ  
はお許しを」

一瞬で土下座をした

「いえ、分かつて貰えれば良いですよ。通つても良いですよね？」

「は、はい。どうぞお通り下さい」

態度がかなり変わったな

門を通過すると…

「うわー、カリイ村よりでかくて、活氣があるな」

そこには、店が沢山あり、店に人が集まって商品の売り買いをしていた

「ええ、確かに此処キャロル村は普通の村よりでかいですね」

数えきれないが、キャロル村の大きさだと、600～700人は入るな

「私は、馬車を預けて来ますので、あのエルダーの宿と書いてある宿の所に居て下さい」

セルードは、村の西の方を指差した

何処だ…あ、あつた

「分かりました」

「では、後程」

「はい」

セルードは西南へ、真哉は西に別れた

読んで下せりてあつがといひざれこます

## 19話（前書き）

修理が終わったので投稿します。遅れていますんでした

エルダーの宿に着いたのは良いが…  
「セルーデさんがあるまで何して暇を潰せば良いんだ?」

(じゃあ離れすぎなによつに、近くの店を見てきたら?)

うん?

(俺つて口に出してた?)

(うん。出てたよ)

マジかよ…シルフィーに氣を使わしちまつたな

(悪いな。氣を使わして)

(大丈夫だよ)

(ありがとな。じゃあ近くの店を見よう)

(おー)

歩いて直ぐに…

(なんか歩く度に、色んな人から見られるんだが、何でだ?)

(ローブで全身を隠してるからだよ。街なら隠す人間も居るけど、  
村で隠す人間は少ないんだよ)

成る程…だけど、外す事は出来ないしな。まあ我慢しよう

(教えてくれてありがとな)

(いえいえ)

あつ、セルードさんの馬車に武器を置き忘れた。馬車の場所が分からんしな…金が勿体ないが、武器を買つか…

「武器屋が分からん」

(歩いてる人に聞けば?)

(やうだな)

また口に出してたみたいだな

あの男性の人に聞いてみよ!…

「あのーすいません?」

「は、はい」

なんか怯えている?

「武器屋って何処にありますか?」

「あ、あつちにあります」

男性の人は、右の方を差した

何処…うん? あれだな。小さいが看板がある  
「教えてくれてありがとうございます」

真哉は男性の人に頭を下げると…

「へつ?」

男性は呆気に取られた様子で固まつた

わつきかうじうしたんだろ?..まあ良いか  
「それでは」

確か看板が…あつた、あれを印に進めば着くだろ

看板を目指して5分後…

着いた

「早速入って見るか」

（良いのが見つかると良いね？）

（ああ）

中に入ると…

うーん、外見はしっかりしてたんだが、中は汚ねえな。武器には埃  
が付いてるし、中も掃除してないな

「はあ、良いのが見つかるとは思えないな」

中は漢字の皿の形でよく見てないから分かんないけど…

（探せばあるかもよ？）

確かに、中は汚いがもしかしたら良いのがあるかもな  
(そうしてみるよ。シルフィーも見つけるの伝つてくれ)

（うん。  
分かった）

探して10分後…

「中々見つからんな」  
(うーん…)

うん？

（どうしたシルフィー？）

（気になる物があつて…）

気になる物？

（何処だ？）

（えつと…あの壺の隣にある物なんだけど…）

壺の隣…あの布が被さつて居るのか？

（近くに行くか？）

（うん）

壺の所に着いたが…

（どうだ？）

（その前に真哉、目に魔力を集めて）

（？分かった）

目に青い魔力を集めるイメージ

目に魔力を集めた状態で布を見てみると…

「な、何だこれ」

（分かる？）

（ああ）

布の中に緑色の魔力を纏つた槍の形が真哉の目に映つていた

だけど…

「何で魔力を目に集めただけで分かるんだ？」

（うーん、説明が難しいね… 多分、魔力は魔力に反応するからだと思つ。それと、目に集めてる魔力を解いた方が良いよ？）

（何でだ？ 結構便利だぜ。普通より遠くの方まで見れる…）

（長く目に魔力を集めると失明するよ？）

マジで！？イメージ解除

（だから、大事な事は先に言え…）

（ごめんなさい。）

（いや、分かつて貰えれば良いんだ。怒鳴つて悪かった）

（うん）

沈…黙

な、何か言おう…

（亭主さんは居ないのかな？）

先に言われた

（分からん。呼んでみよう）

「すいませーん、誰か居ますかー」

「は…」

凄え小さい声。声の方向は… 多分入り口から真っ直ぐの奥。行ってみよう

あれ？カウンターは、あるんだが、声の主が居ないな 「あのー、何処ですかー」

「此…で…」

スンッ

声は、カウンターの下からだけ…泣いてる？

とにかく、近くに行つてみよう。えーと…居た

「大丈夫か？何処か痛いのか？」

「違、う…お、お父、さんが、鉱、山から、帰つ、て、来な、い」

スンッスンッ

鉱山か…

「君のお母さんは？」

「病、氣で、寝込、ん、でる」

スンッスンッ

うーん…出来るか分からんが…

「お母さんの所に案内してくれる？」

「何、で？」

スンッ

「お母さんの病氣、治せると思つ  
(やつぱり、真哉は優しいね)

(「ひるせえ…シルフィーも手伝えよ?」)

(クスッ分かつたよ)

笑いやがつて

「本当、に?」

「ああ、だから泣くな、な?」

「う、ん…お母さんの所に案内するから来て」

「おう、頼む」

言つたからには、成功させないとな

(シルフィー怪我や、病氣を治す呪文を教えてくれ)  
(だけど、真哉はイメージが出来るでしょ?)

確かにそうだが…

(イメージは人間には使えない。

イメージは者達しか使えないし無言で治したら変だろ?)

(確かにそうだね…でも真哉は呪文の使い方を知らないよ?)

(そりだけど、呪文の言葉だけ言つて、後はイメージでやるから大

丈夫だ)

本当なら魔法は、人前では使いたくないんだけど…  
まつ、姿は隠してるから大丈夫だろ

(成る程ね。分かつたよ…確かに、ヒール、これは怪我も治せるし体力も回復する。それにフ割位はヒールで病氣も治せるよ)

(聞きたい事が2つある)

(何?)

(言葉はヒールだけか?)

(大体はそうだよ。言葉を付け加える人間も居るけどね)

大体がそなうなら大丈夫だな…それに一番聞きたいのが…

(最後だが…7割はヒールで治せるって言つたが、残り3割は?)

7割の病気なら良いが…

(呪文では病気を取り除く方法が無いね。病気の場所が分かれば、イメージで取り除けるけど、分からなかつたら無理だね)

もし3割だつたらヤバイ。だけど…

(場所が分かれば良いんだよな?)

(そうだよ。)

「此処」

子供が止まり、田の前の木製の扉を指差した。

どうやら、着いたようだな(もし、3割の場合は取り除く方法を教えてくれ)

(分かつたんだよ)

「開けて良いか?」

「うん」

俺が扉を開ける瞬間に…

「どうした？」

子供に上着の裾を掴まれた

「お母さんを…お母さんを、お願い、します」

子供は涙を堪えながら、真哉に言った

「ああ。終わつたらすぐ呼ぶから、此処で少し待つてくれ」

「うん」

よし、じゃあ行くか

真哉は扉を開け、中に入つて扉を閉めた

中に入つて…

殆ど何も無いし暗い…あるのはタンスとベッドか…

ゴホツゴホツ

今はそんなことを考へてる場合じゃないな…近くに行つて体の具合を調べよう

見て分かるのは、顔が青白い事位か…

(真哉、私が調べるから何処かに触れて…)

触れてつて言われて…

(首飾りの状態でも分かるのか?)

(分かるけど、首飾りの状態だと真哉を通さないと分からぬけど  
(ね)

成る程、だから調べるのに触れる必要があるのか

(触れるのは手でも良いよな?)

(うん、大丈夫だよ)

なら、布団から手を出そう

(どうだ?)

(待つて……結構危ない状態だけど、これならヒールでも治るよ)

(本当か!?)  
(うん、だけど結構危ないから早く治した方が良いよ)  
良かつたあ

なら、早速…

「ヒール」

俺が触れてる人の、体力を回復し、病気が治るイメージ

真哉の触れてる人が、緑色に薄く光り、光りが消えたと思ったら次  
は、薄く白色に光り直ぐに消えた。

治つたのか?

「あの一大丈夫ですか?」

「スースー」  
(寝てるね)

(ああ。だけど顔色も良くなつたし、咳も止まつたから治つたよな  
?)

(うん、安静にしてれば、明日には動ける様になる筈だよ)

(やつか…なら子供を呼ぶか  
早く安心させてやらないとな)

(クスッ)  
(何で笑つてんだ?  
(別に~)

?まあ良いか。それより子供を呼ぶか  
「おーい、入つて大丈夫だぞー」

子供が扉から少し顔を出し:

「あの、お母さんは、大丈夫?」  
子供は不安気に言った

「ああ。だから此方に来いよ  
真哉は手招きをしながら子供を呼んだ

「うん……お母さん?」

「今は安静にしといた方が良い。君は此処でお母さんを見てるんだ」

「お兄ちやんは?」

俺は…

「鉱山で君のお父さんを探してくるから、君の名前とお父さんの名前を教えて欲しい」

「僕はダン、お父さんはガントツだよ…それとお父さんをお願い

ダンヒカンテツさんか…

「おひ、任せる。だからダンはお母さんと待ってるんだぞ?」

「うそ」

大丈夫そうだな。それじゃ行くとするか

真哉は扉を開け、外に出て行った

一回エルダーの宿に行こう。セルードさんが、待ってるかもしだいしな

宿に向かって数分後…

「あつ真哉さん、何処に行つていたんですか?」セルードは焦った表情で真哉に言った

やつぱり、心配かけちましたな

「すいません。待たせてしまつて…武器屋に行つてました」

「いえ、私は大丈夫ですが…どうして武器屋へ?」

「私用で行つてました。」

「そうですか…では、宿で休みますか?」

「いえ、まだ私用が残つてるので行つてきます  
ダンの父親を探しに行かないとな

「そうですか…分かりました。では、気お付けて行つてらっしゃい  
ませ」

「はい…すいません。折角宿を取つて頂いたのに」

「大丈夫ですよ」

そう言われても…

「ですが…」

納得出来ないしなあ

「どうしてもとまつながら、敬語を止めてくれ。それで、無じこしますよ?」

「それで、良いのなら

本当にそれで大丈夫なのか?

「ええ

「分かつた…これで良いか?  
でも何故に敬語を?」

「はい…やはり無理をしていましたね？」

「少しだ」

何で分かつたんだ？まあ良いか

それより急がないとな

「それじゃ行つてくる。宿の事は悪かった」

「いえ、大丈夫ですよ」

出来るだけ早く帰つて来よう

真哉は村の北の方の山に向かつて行つた

読んで「あいつがどうやらこもる

少し早く完成したので、投稿します  
誤字が見付かつたら、教えて下さい

山に来たのは良いんだが……「鉱山って何処だ?」「(私には分から……あつ、あれに何か書いてない?)

何処だ?

「何処にあるんだ?」

(ほらつ、この坂の上にある木の看板に書いてあるよ)

あれか……

「よし、行つてみよ!」

しかし、道が一本しか無いな……周りは木だらけだし道が無かつたら、迷つてるぜ

(どうしたの? 着いたよ)

おつと、考えてる内に着いたみたいだな

「ああ。教えてくれてありがとな

(いえいえ)

えつと、何で書いてあるんだ?

「何々……此処から先2キロ地点に分かれ道があり、右に鉱山があつて、左が鍾乳洞か」

へえ鍾乳洞か……懐かしいな。後で見に行けたら行くか

(道が分かつたんなら、急げよ)

「そうだな」

出来るだけ急がないとな……走るか

走つて数分後…

此処が看板に書いてあつた分かれ道か…確か鉱山は右だつたな

真哉が右に向くと…

「マジかよ」

一気に岩が剥き出しの道になつてゐるな

精神的に辛い…まつ、考えてもしようがない

「ふう」

もう少し頑張るつ  
(頑張つて)

「おう」

岩剥き出しの道を走つて数分後…

「おつ、結構でかい建物が見える」

ん?近くに人が集まつてゐる…何かあつたのか?

真哉はフードを深く被り顔を隠し、人が集まつてゐる場所に向かつた

集まつてゐる人皆、ガタイイが良いな

「何かあつたんですか?」

近くの人に聞くと…

「ああ。何人かがドルーチュに噛まれたらしこんだ  
焦つた表情で言った

ドルーチュ？

（シルフィー、ドルーチュって何だ？）

（ドルーチュって言ひのは石化を持つ蛇だよ）

蛇は分かつたが、石化？

（石化つて？）

（石化は、時間が経つと段々石になつていく、呪いだよ）

じゃあ、中に居る人はその呪いで…

（治す方法は？）

（石になつてたら、治せない。だけど、時間があまり経過してなければ、助ける方法はあるよ）

（もうか）

「ドルーチュに噛まれて、どの位経ちましたか？」

「もうだな…噛まれて3日つて所だ」

「そうですか…」

（どうだ？）

（うーん…かなり危ないから、急いで治した方が良いね）

「噛まれた人の所へ案内して下さい」

「どうしてだ？」

「治せると思いますから」

「本当か！？」

驚きながら、真哉に詰め寄つた

「え、ええ。ですが、早く治さないと危ないので…」

「分かつた、じゃあ眞を退けてくれ」

「あ、あれ？」

行つちまつたか…まあ良いとにかく治す方法をシルフィーに聞こう

（シルフィー、石化を治す呪文はあるか？）

（石化を治す呪文は無いね。イメージしか治せる方法が無いんだよ）

（そつか）

呪文は無しか…イメージで出来るのは良いんだが…

「眞を退けたぞ。早く来てくれ」

「あつ、はい」

フードは深く被つて、顔を隠してるから呪文言わなくとも大丈夫だろ

「噛まれた人は何人居るんですか？」  
大人数だと助けられない人が出そうなんだが…

真哉は案内をしてくれてるガタイの良い人に聞いた

「2人だ」

2人か…大人数じゃなくて良かつた。

「此処だ」

ガタイの良い人は目の前の鉄製の扉で止まつた

ガタイの良い人は鉄製の扉を開け…

「出来るだけ早く右の奴を治してやつてくれ」

「こいつ、差別をするのか?」「どうして?」俺は少し怒氣を込めながら言つた

「左の奴は知らんが、右の奴は、妻と息子が居るらしいんだ。だから早く治してやつてくれ」

そうゆう事か…

「分かりました。頑張ってみます」

俺は石化になつている人達に近づき状態を見ると…

首から下は石になつてゐ…こりやあ本当に早く治した方が良いな  
「見てないで早く治してやつてくれよ」

「！」

居たのかよ…はあびっくりした

「あの、少し離れ…」

あつ、そうだ

「何だ?」

「治すのに集中するので、部屋の外に居て下さい」

「これなら、呪文を言わなくても大丈夫だな

「そうゆう事なら、仕方ねえな。じゃつ、そいつら頼んだぜ?」

「はい」

ガタイの良い人は鉄製の扉を開け外に出て行つた

「ふう」

よし、始めるか…

「先ずは右の人から治したいけど、左の人も危ない状態なんだよな  
あ」

どうするか…

(一緒に治せば?)

一緒にって言つたつて…

「ん?」

…そりか!別にイメージは1人だけじゃなくても良いのか

(シルフィー、ありがとう) (いえいえ)

じゃつ、早速…

石化の治すイメージが分かんねえ…触れて確かめないと駄目だな

真哉は2人の間に入り、石の部分に触れた

うーん…何か、あまり石と変わらないんだな…イメージは、この石

を剥がす感じで大丈夫だよな？

うーん、試して見よう

先ずは2人に触れて…

「ふう」

触れた所から石が剥がれるイメージ

石の部分だけに、白く光った瞬間に…

ピシッピシッピシ

石に亀裂が走り、足から徐々に石が剥がれて行つた

（これで大丈夫なのか？上半身には石がある様だが…）  
真哉は少し不安気に、シルフィーに聞いた

（大丈夫だよ。上半身のは石が乗つかつてるだけだよ）  
（そうか…）

「う、うん？」

「此処は？」

おっ、2人共起きたな

「此処は鉱山の手前の建物ですよ」

「だ、誰ですか？」

「そりが…」

誰つて言われてもなあ…まあとにかく

「こ」の格好で言うのもなんですが、怪しい人ではありません

俺が思うに、最初に喋った左の人は、冒険者の初心者って感じで、妙に落ち着いてる右の人は、熟練者って感じだな

「あんたが助けてくれたのか？」

「石化を治したのは、自分ですが、運んだのは外に居る人達です」  
真哉の話を聞いた瞬間に…

「ええ！ ぼ、僕石化になつてたんですか！」 初心者は驚き、大声で  
真哉に聞いた

うるせえな

「ええ。覚えて無いんですか？」

「は、はい…右足に激痛が走ったのは、分かったんですが、そこから記憶が無くて…」

成る程な…

「まあ、兎に角助けて貰つたんだ。先ずは…」

熟練者は立ち上がり…

「礼を言う

真哉に向かって頭を下げた

「ぼ、僕も助けて貰い、ありがとうございました」

初心者は、慌てて立ち上がり、真哉に頭を下げた

「いえいえ。助かつて良かつたですよ」

そういうえば、この2人は鉱山に入つてたから、もしかしたら…

「質問して良いですか？」

「ああ」

「何ですか？」

「鉱山の中でガンテツさんつて聞いた事あります？」

「いえ、僕は分かりませんが…」

「ガンテツは俺だが、俺に何か用か？」

目の前にいたよ。まあ見付かつたから良しとするか  
「ええ。ダンが心配してましたよ」

「何つー!その前に何で、その名前を知ってるんだ?」

「まあ良いじゃないですか。それよりダンが心配してるので、帰りますよ?」

「…そうだな。ダンが心配しててるなら、帰るよ。それと、礼をした  
いから、また武器屋に来てくれ」

ガンテツは、そう言い残し走つて部屋を出て行つた

「行つちやこましたね」

「え?あの…」

「ええ」

「そうだ

「質問して良いですか？」

「良いですよ」

「自分は訳あつて名前は名乗れませんが、良ければ名前を教えて下  
れー」

「僕はリュウと言います。じゃあ何で呼べば良いですか？」

「そうだなあ…うん?これで良いか

「では、クロと呼んで下さい」

「ローブの色と一緒にですね」

「ええ」

やつぱり気付いか

「他に質問ありますか?」

「うーん、じゃあ…

「リュウさんは、鉱山で何をしてたんですか?」

「リュウで大丈夫ですよ。クエストで鉱山に行つてました」

「クエストか

「因みに何を?」

「確かに…拳位の鉄鉱石を5つです

「取れましたか？」

取れて無いなら、一緒に行きたいんだが…

「それが、取る前に石化になってしまったので…」

なら

「もし、良ければ一緒に鉱山に行つて貰えますか?？」

「えつ? 良いですが…」

やまつアリマカ?

「自分弱いですよ?」

そつちかよ

「大丈夫ですよ、最初は誰でも弱いです。それに、サポートはしますから」

「じゃあ、宜しくお願ひします」

リュウは真哉に右手を出した

「此方いしゃ」

真哉も右手を出し、リュウの右手を握った

「それじゃあ、少し…」

「ンンン

誰だ?

「どうぞー」

鉄製の扉がゆっくり開き…

「あんた凄えな。まさか本当に治しちまうとはな」  
そこには、案内をしてくれたガタイの良い人が立っていた

「はい。治つて良かつたです」

「これから、何処に行くんだ?」

「少し休んだら、鉱山に行こうと…」

「はあ?鉱山にはドルーチェが居るんだぞ?」

分かつてるさ

「大丈夫ですよ」

「大丈夫ですって…はあ、分かつた。鉱山に行くなら俺も着いて  
行く」

えつ?何故に?

「どうしてですか?」

「鉱山の中で道や、何が何処にあるか、知ってるのか?」

「そうゆう事か…

「では、お願ひします」

「おう。俺の事はテツって呼んでくれ

「はい。自分はクロと呼んで下さい」

「ほ、僕はリュウと呼んで下せこ」

「おひ。じゃあ準備が出来たら外に出て来い。」

「分かりました」

テツは鉄製の扉を開け外に出て行つた

読んで「あいつがどうやるこかね」と思つてます

## 21話（前書き）

誤字があつましたら、教えて下さい

さて、俺は元々準備は出来てるから良いが…

「リュウ、大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫ですよ」

それなら…

「行きましょう」

「はい」

真哉とリュウは、鉄製の扉を開け外に出て行った

「早えな準備はもう済んだのか？」

まあ…

「自分は、元々準備出来てましたから」

「ぼ、僕も必要最低限の準備は出来たんですが、その…ピッケルを無くしてしまったので…」

あつ、そういうえば俺もピッケルが無いな…

「それなら大丈夫だ。この建物の裏に倉庫があるから、その倉庫からピッケル持つてこい。まあ少しボロいがな」

俺の場合、無くても大丈夫だったが、あるんなら使わせて貰おう  
「では、お借りします」

「ぼ、僕も借ります」

俺はリュウと一緒に建物の裏に向かう時…

「おう。別に借りるんじゃなくて、貰つても大丈夫だぞー」

貰つて大丈夫なんだ

「分かりましたー」

「はーい」

俺達は返事をして、再び倉庫に向かつた

おっ、あれか…倉庫の割には結構でかいな。あの高さは6メートル位あるぞ

「行かないんですか?」

「えっ?あっ、行きましょう」

倉庫を見て、止まつてたのか

「はい」

「あれが、入り口ですかね?」

リュウは、困惑した様子で真哉に聞いた

「多分そうだと思いますよ」

2人の視線の先には、5メートルの所に一ヵ所だけ開いた窓があつた

「僕、裏を見てきます」

じゃあ俺は…

「よつ」脚に少しだけ力を込めて、窓に向かつて跳んだ

「到着」

「クロセーん、何処に行つたんですかー」

「此処ですよー」

「えつ？ええー、ど、どうやつたんですかー」

「え！な、何か無いか…あつ、あつた

「今、持つてくるので、待つてて下さーい」

確かに、ロープがここいら辺に…これだ。うん、長さも十分  
これを、柱に固く結び付ける。

ミシシッ

…ま、まあ柱にロープをリュウに

それより、このロープをリュウに

「今、渡しますよー」

「はーい」

リュウは、ロープを掴んだが…

ん？

「どうしたんですかー」

「あ、あのー、引っ張つて貰えますかー」

「そうゆう事か

「分かりましたー。しっかり、掴んで下さいよー」

「分かりましたー」

20秒後：

「ず、随分力持ちですね」

まあ、この世界に来てから身体能力が桁違いに上がったからな  
「ええ。それより、ピッケルを探しましょう」

「そうですね」

ここいら辺は、ロープや、ランプだけみたいだな。階段が見付かった  
し、下に行くか

「自分は、下に行つてきます」  
一様リュウに伝えると…

「僕も行きます」

リュウと一緒に下に行く事になった

ギシッギシシ

「この階段、大丈夫か？」

「あれじゃないですか？」

「ん?」俺はリュウの指差した方向を見ると…

「確かに、ピッケルですね。では、早速持つて行きましょう。テツさんも待つてますし」

「やうですね」

確かに、少しボロいが、贅沢は言えないな。それに、貰つても大丈夫って、言つてたし、5本位空間に入れてくれる

「僕は1本しか持つて行けませんけど、クロさんは、何本持つて行くんですか?」

リュウは、苦笑いをしながら、真哉に聞いた

「自分は、2本持つて行きます」

正確には、空間の中も含わせて、7本なんだけどな

「そうですか…まあ見付かった事ですし、テツさんの所に行きましたよう

確かにそうだな

「ええ」

俺達は階段を登つた

「誰が最初に降ります?」

俺には少しやる事があるから…

「先に降りても大丈夫ですよ」

「そうですか…じゃあお先に」

「ええ」

リュウは、ロープを使ってゆっくり降りて行った

数分後…

「クロちゃん、次良いですよー」

じゃあ俺は、ロープを切ろう。俺には必要ないし、誰かに荒らされるのは、嫌だしな

俺はロープに近づき…

「風よ」

風のナイフで、ロープを切り、窓からジャンプした

「ええー！」

ドンッ

地面から鈍い音を発しながら真哉は着地した

「クロちゃん、大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫ですよ」

真哉は、何事も無かつたような様子で言った

「そ、そうですか…と、兎に角テツさんの所に行きましょう」  
「そうしましょう」

俺達は、テツさんの所に向かって行った…

「おひ、持つて来たな。じゃあ出発するか」

「はい」

「は、はい」

リコウは緊張しているのか…「リコウ、自分やテツさんが居ます。それに魔物が出たら一緒に戦うので大丈夫ですよ」

「あ、ありがとうじゃこます」

(あれ?サポートじゃなかつたの?)

(確かに、サポートだけにしようと黙つたが、手が震えてるのを見ると、な)

(ふふつ、真哉らしいね)

(何だよ、俺ら…しご…つて…あー…)

(ど、どうしたの?)

(シ、シロを馬車の中に誘れて来ちました)

(それなら、私が行つてくるよ)

(だけど…)

(良いから、真哉は鉱山で頑張つて)

(うーん…分かった。じゃあシロを頼む)

(うそ、任せへ)

「クロさん、何か光つてませんか?」

やべえ

シルフィーを俺とシロ以外見れないイメージ

「じゃあ、行つてくるね」

シルフィーは、小声で真哉に言つてから、飛んで行つた

「あれ?」

「み、見間違いですよ」

焦つたあ

「やうなのかなあ…」

「おーい、早く来ーい、置いて行つちまうぞー」

「それよつ、急ぎましょ。置いて行かれてしまいますよ~」

「そう、ですね。置いて行かれるのは、困りますしね」

真哉とリュウは、テツの所まで、走つて行つた

テツの所に着いたら…

「まったく、鉱山の中でやうやうのま、無じてしてくれよ?」

少し注意された

確かに、鉱山の中ではぐれたら、やばいよな

「はい」

「いめんなさい」

「分かれば良い。じゃあ行くぞ」

短い間だが世話になるわけだから…

「宜しくお願ひします」

挨拶位はしごといつ

「お、お願ひします」

「おひ。道案内は、俺に任せろ。」

鉱山の入り口に着いて…

「一様注意事項を言わせて貰うが、質問は俺が、言い終わったらにしてくれ」

「分かりました」

異世界の鉱山に何があるか、分からぬから助かるぜ

「はい」

「先ず、絶対にはぐれるな。これが1つ目。次に、鉱山の中にあるクリスタルや、鉱石には、触れるな。これが2つ目。最後に出来るだけ俺の指示に従ってくれ。この3つは覚えていてくれ…質問はあるか？」

「じゃあ…」

「質問良いですか？」

「ああ」

「注意事項の1つ目は、分かつたんですが、2つ目と3つ目はどうですか？」

「先ず、2つ目の方から説明する。2つ目のクリスタルや、鉱石に触れるなってのは、危険だからだ」

「危険、ですか？」

何でだ？

「そうだ。知識があるんなら別だが…クリスタルや、鉱石には、色んな種類があるのは知ってるよな？」

「えつ？ええ。まあ少し」

詳しく述べ無いが、地球と一緒になら、少しは分かる

「一般人でも知ってる、鉱石、魔石、クリスタルとは、違う物が鉱山にはあるんだが、まあ魔石は殆んど見付からないな」

魔石ってなんだ？

「あのー、魔石って何ですか？」

「うーん、俺もよくは知らないが、確かに魔石を使えば魔法使いや、魔術師の魔力が回復出来るんだとよ」

へえ、意外と便利な物もあるんだな

「まあ、魔石は普通の石じゃ、鉱石と形が一緒だから熟練者でも

見分けがつかないんだと。それに、魔石はかなり高額らしいぜ？」

高額か…

「因みにどれくらい何でしようか？」

「質によって違うが、確かに最低でも銀板一枚で、最高が金板数枚つて聞いた事がある」

「マジで！ 魔石つて最低でも10万はするのかよ。しかも最高が数千万つて…」

「す、凄いんですね」

「ああ。だから、魔石を狙う奴等が増えて、鉱山で死ぬ奴も多くなつてきてる」

「うなのか…」

「何か、勿体無いですね」

「勿体無い？」

「ええ。命があつてこそじゃないですか。確かにお金は魅力的ですが、そこで、死んだら終わりですよ」

「そう。死んだら終わり…俺は、待ってくれてる奴等が居る。だから奴等を残しては死ねない」

「真哉は、固く決意した

「ふつ、ふははははは」

…

「何で、笑ってるんですか？」

真哉は、少し怒氣を含めてテツに言った

「いやー、すまん、すまん。しつかし、クロの言つ通りだ。確かに、命あつてこそだし、死んだら終わりだ。これを魔石を狙つてる奴等に聞かせてやりてえな」

「ええ。 そうですね」

聞く耳を持つかは分からんけどな

「あのー、出来れば説明の続きを……」

リュウが少し手を上げながらテツに言った

「ああ、そつだつたな。確か…鉱石や、クリスタルには色んな種類があるから、知識がないなら危険だから触るなって所だよな？」

俺、覚えてねえ

「ええ。 そうですよ」

リュウは、よく覚えてたな

「まあ、何故危険かと言うと、鉱石や、クリスタルには、色んな種類があるんだ。例えば、毒や麻痺を含んだ物だつてあるし、触れれば爆発つて物もある……」

そんなに、危ない物もあるのか

「そして此処で、3つ目の注意事項が出てくる。怪我をしたくないなら、俺の指示に従つてくれって言つ事だ」

成る程

「質問に答えて下りありがとうございました」

「おつ。お質問は無いのか?」

「自分は、無いです」

俺は、答えて貰つたが一様言つといつ

「僕もあつません」

「せうか……じゃあ、鉱山の中に行へば?」

「はい」

初めて、入るから少し緊張するな

「ええ

リュウの、震えは少し消えたみたいだな

## 21話（後書き）

9月に忙しくなるので、更新が出来なくなる可能性があります。出来るだけ更新を頑張ります。

## 22話（前書き）

なんとか完成したので、投稿します。遅れてしませんでした

鉱山の中に入つて数分後、「そろそろ、明かりを点けよつ」まだ明るいが、この先何があるか分からぬしテツさんの言ひ通りにしよう

「ええ」

「えつ？まだ明るいですよ？」

リュウは、準備してテツに質問した

「確かにまだ明るいが、この先一気に暗くなる。それに、油断してると奴等みたいになるぞ？」

テツはランプを持ち、ある方向を指差した

ん？骸骨か…

「ひつ」

リュウは、震えながら真哉のロープの裾を掴んだ

「油断をしなければ大丈夫ですよ」

俺はリュウの、肩を軽く叩きながら励ました

「そう、ですよね？」

「ええ」

「ありがとうございます。この鉱山で何回か見たんですが、やはり骸骨を、見ると、あ、足が震えて…」

「りやあ精神が不安定になつてる。少し休ませよつ  
「それ以上は、いいですから少し休んで下さ」」

「すい、ません。そつこま」リュウは、骸骨から離れた岩に腰掛けた

「テツさん、ちょっと良いですか?」

「ああ」

俺はテツさんを、リュウから離れた所に呼んだ

リュウの事なんだが…

「どう思います?」

「正直、あの状態だと危険だな」

やはり、な

「今日は、引き返した方が…」

「いえ、大丈夫です」

「！」

びっくりしたあ。敵意や殺氣が無かつたから気付けなかつた

「本当に大丈夫なんだな?」テツは、リュウに詰め寄つた

「ええ。もう大丈夫です」

「次に俺や、クロが危険と判断したら引き返すからな？」  
テツはリュウを睨みながら言つた

「ええ。大丈夫です」

リュウもテツを睨み返した

「ふんつ、まあ良いだろう。じゃあ出発だ」

テツは鼻を鳴らし、再び鉱山の奥え向かつた

「本当に大丈夫なんですか？」

真哉がリュウに問うと…

「ええ、本当に大丈夫です。心配してくれて、ありがとうございます」

す

うーん、まあ…

「大丈夫なら、良いですが…では、テツさんを追いかけましょう」

「はい」

俺達はテツを追いかけた

鉱山に入つて20分後…

何か、段々狭くなつてきたし、岩も剥き出しになつてきたな。最初は進み易かつたが…

ん？テツさんが止まつた？

「テツさん、どうしたんですか？」

「何か妙だ」

妙?

「どうゆうひの事です?」

「いや、此処まで鉱山の奥に来れば魔物が現れる筈なんだが……」

「やうづへば、そうですね」リュウは、テツの言葉に同意した  
「うーん、俺にはよく分からんが……」  
(真哉、シロ見つかったよー)

「一.」

「クロちゃん、どうしたんですか?」

「いえ、何でもないです」  
はあー、心臓が止まるかと思った。それにしても……

(何で、首飾りをしてないのに、シルフィーの声が聞こえるんだ?..)

(実は、首飾りをしなくても契約をしたから、声が届くんだよ)

「うなんだ……」

(シロは?)

(まだ寝てるよ。真哉は大丈夫?)

「うか

(俺は大丈夫、帰つたら何か美味しい物を食べようぜ~)  
(本当にー約束だよ?)

(ああ、約束だ)

(「ふーーじゃあ楽しみに待つてるね?」)

(あこよ)

ふつ、一気に声のトーンが上がったな

「クロはじつすんだ?」

テツが真剣に問い合わせた…

「えつ?」

話し聞いて無かつたあ

「なんだ? 話し聞いて無かつたのか?」

「はい、すいません」

完全に俺が悪いよなあ

「まあ良い、もう一度言いつか?」

「はい、お願ひします」

「俺は、嫌な感じがするから、引き返した方が良いこと思つたが…」

「いじえ、もう少しだけ進みましょ?」

「やうやうの事ですか…」

テツさんは、引き返した方が良いと思つてるが、リュウは逆に進みたこと思つてる。で、テツさんは、俺に決めて貰おうとしたのか

「つーん、テツさんに聞きますが…」

「なんだ？」

「鉄鉱石が取れる場所はあと、どれ位ですか？」

取れる距離によつて、進むか、引き返すかが、決まる

「そうだな……あと、数分つて所だ」

数分つて所か…

「それなら、進みましょ。で、目的の物が取れたら、急いで引き返しましょ！」

「はい！」

リュウは、元気に返事をした

「クロが、そつぱつなら……」テツは、少し迷つた様子だが、クロに同意した

テツさんに、悪い事したかなあ？？といあえず…

「すいませんテツさん」

謝り

「いや、クロが謝る必要は無い…兎に角決まつたんだ。行こうぜ？」

「ええ」

「はい。行きましょ！」

数分後…

そらにて岩の剥き出しが目立つてきた。それに、此処つてかなり広い…半円のドーム形で高さ約40メートル端から端は約300メートル

つて所か

「あれだ」

テツは、ランプで照らしながら左の方向を指差した  
ん？あの一ヵ所だけ色が違う部分か？

「色が少し違う部分ですか？」

リュウは、テツに聞くと…

「ああ。だが気お付ける、此処で死んだ奴は少なくない」テツは、  
真剣な様子で答えた

確かに、此処は骸骨が多い。本氣で頑張りつ

先ずは…

目で危険な物を見分けるイメージすると…

「おいおい…」

殆んどが危険な物つて、マジかよ…赤、紫、黄色に光つてるのが危  
険つて分かるが、光つて無い黒は何だ？

「此処を掘る」「うん？」

うん？テツさんの声？

「リュウは、少し離れてろ」

テツが持つてるピッケルで紫色の部分を…

ちよつ！

「ま、待つて下さー！」

ガキング

「な、何だよクロ、掘る直前に驚かすんじゃねえよ」

あつぶねえ、もう少し左だつたら、紫色の所に当たつてたぞ。それと…

「ですが、そこは危険ですので…」

注意しつかないと

「何でクロは、此処が危険だと分かるんだ?」

うーん、顔は分からなくても、教えるのはなあ…

「勘、では駄目ですか?」

「それは無理がある…言いたく無いのか?」

前半は苦笑いをして、後半は少し真剣な様子で俺に聞いてきた

やはり、無理があるよなあ。それに…

「出来れば、言いたく無いです」俺が答えた瞬間…

「クロさんは、魔法使いじゃないですね?」

確かに魔法は使えるけど、正式な魔法使いじゃないから…

「ええ。魔法は使えますけど、魔法使いではありません。自分は旅人なので」

「そうですか…もし、ギルドに入るんでしたら、魔法使いに注意して下さい。魔法使いの殆んどが高慢で、何時も威張つたり、人を見下す事しかしません」

と並んで、

「ココウは、何か言われましたか？」

「ええ。お前……」

「いえ、言わなくて良いです。取り敢えず、クエストを終わらせましょう」

けつ、魔法使いつてのは肩が多いらしいな

「はい」

「テツさん、自分が掘るので、下がつて貰えますか？」

「だが……」

「お願いします」

俺はテツさんの言葉を遮り、テツさんの手をジックと見た

「うーん…分かった。だが怪我はするな。それと、分からぬ事があつたら俺に聞け、良いな？」

「はい」

なら、早速質問を……

「危険な鉱石は、鉱石に当てなければ良いんですね？」

光つて無い部分の鉱石を掘りながらテツに聞いた

「ああ。それに、危険な鉱石には色があるんだ。爆発なら、赤、痺なら黄色つてな」

成る程…うん？縁？

「テ、テツさん？」

「どうした？」

光って無いから大丈夫な筈だけど…

「これって大丈夫なんですか？」

緑色の鉱石を指差しながら、言った

「ほう、こいつは珍しい」

「どうゆう事だ？」

「この鉱石は一体何ですか？」

俺は気になり、テツさんに聞くと…

「これは、ヒール石と書いて魔石の一種だ…」

ヒール石って事は、使えば傷が治るな。せれに魔石の一種か

「取り出して、よく見せてくれ」

「分かりました」

初めての魔石だ。慎重に掘り

5分後…

うーん、もう少しで掘れるんだが…

「クロさん、どうしたんですか？」

リュウは俺の動きが止まつたのを見て、少し迷いながら聞いてきた

「それが、もう少しで掘り出せるとですけど… テツさんは何処に…」  
いつの間に行つたんだ?

「テツさんは、クロさんが掘つてゐる間に他の場所を見てくるつて言つて、少し前に行きましたよ」

「そう、ですか」

他の場所に言つたのか。それなら…

「呼んで来ましょつか?」

「いえ、呼ぶんではなくテツさんの様子を見て来て下さい」  
その間に赤の鉱石を取り除く。リュウには、怪我させたくないからな

「分かりました」

リュウは返事し、離れて行つた

「赤の鉱石に当たなければ爆発はしないんだったよな…ふう」

俺は体の力を抜き考えた。

ヒール石を掘り出すには、先ず、この赤い鉱石を取り除かなければならぬ。

だが取り除くには、ピッケルで当たない様にして慎重に取り除かないと爆発、か…

「待てよ…」

「当てなければ良いんだろ… それなら空間に入れれば問題は無い筈だ

「早速試そう」

「… 駄目だ。上手くイメージ出来ねえ。どうイメージすれば… おつ、  
これなら…」

イメージ

「手で触れた物を直接空間に送る」

声に出す必要は無いが、まあ何となくだ

そして、赤い鉱石に触ると… 一瞬で田の前から赤く光ってた物が  
消えた

「何か面白れえ」

俺は調子に乗り、次々に光ってる物を空間に送つて行つた。結果…

「調子に乗り過ぎて、穴だらけになつちまつた」

穴だらけなのは、無視の方向で…

「取り敢えず、ヒール石発掘の続きをしよう」

数分後…

危険な鉱石を無くしたからヒール石が簡単に取れた  
「それにしても、このヒール石つて凄く綺麗だな」

大きさは、テニスボール位で形は凸凹だが、透き通つた緑色のクリ  
タルの様だ

うん？ 後ろに人の気配つて事はテツさん達か？

## 「一様調べよう」

俺は五感の1つ聴覚に集中すると…

2人分の足音が聞こえ

。トジケルの顔だが、(ア)アーティストがも厭う。アーティストも可

を競つてたんだ?

確かにリュウの声だが、

「リュウよ、それは負け惜しみと虹ひやつだぞ?」

「鉄鉱石やヒール石も取れたし、此方から合流するとしよう」  
音のした方向は、確かに来た道の方だつたな

俺は合流するために、歩こうとした瞬間に…

シナリオシナリオ

「可」  
「能」

いや、この明確な敵意は魔物か…この敵意、キングファングより圧倒的に強い

「何でしょう?」

「わあ、どうか崩れてるんじゃねえの？」

本当に崩れてるだけなら、良いんだがな。それより避難させないと…

デシンジデシンジ

ちつ、もつ少しで此処に着いちまつ  
「直ぐに避難して下わい」テツさん達を戦闘に巻き込む訳にはいか  
ない

「どうしたんだクロ？ そんなに焦つて…」

「いいから直ぐに避難を…」

デシンジデンジ

着ぐの速すぎだろ

「な、何ですか、あ、あれ」

リュウは腰を抜かし、腰を抜かした状態で魔物を指差した

「おいおい、何の[冗談だ…」

グオ？ オ？ オ？ オ？ オオオオオオ

「…」「ゴーレム」

そこには、8メートル以上ある岩の塊が腕を上げ、咆哮した

読んで下さりありがとうございます

## 23話（前書き）

更新遅れてしまいすいませんでした。1-2月まで忙しそので、更新が遅れる事があります

早く逃がさねえと、マジでヤバい  
「早く避難して下さい！」

「だが、クロはどうすんだよーー？」

俺は…

「あいつと戦つて時間を稼ぎますので、その間に逃げて下さい」

真哉はゴーレムを指差し説明した

「無茶だ、ゴーレムをたつた一人で相手出来る訳が無え。それに…」

「ゴーレムが腕を真哉達の所に…  
グオ？オ？オオオオ

「ツ！」  
ドッガーンッ  
振り落とした

危ねえ、俺がもう少し助けるのが遅れてたら、2人共死んでたな

「あ、ああ…」  
リュウは氣を失つたか

「早く行け！」

「だから、お前一人じゃ…」

はあ、もつ良い。このままじゃ埒が明かねえし…

「水よ」

2人の全身を息が出来る水の玉に閉じ込め、壁に当たると水が破裂するイメージ

「おい、何だゴボゴボ…」

「じゃあな」

真哉は小さい声で咳き、水の玉を出入口の方に蹴った瞬間…

オオオオオ

「ゴーレムは蹴りを放つが…

「おつと、最後まで見送らせるよ」

真哉はゴーレムの蹴りを避けた

つたく、まだやり残しがあるつてのに…

「土よ」

出入口を硬い岩で塞ぐイメージ

「これで、良しつと…」

「さあて、次は俺から行くぜ」

先ずは、小手調べ…

「火よ」

ダイナマイトの威力と同等の丸い火の玉を4つ空中に浮かせ…

「行け」

胴体を中心に火の玉が当たるのをイメージ

ビビビビビーン

ゴーレムに火の玉が当たり土煙を上げゴーレムが見えなくなった

「これで、倒れてくれれば有難いんだが……ツー」

俺は咄嗟に魔力を腕に覆い魔力で覆つた腕を交差し黒い何かから体を守つたが……

ビキッ

「ぐつ」

足で地面を削りながら……

ドンッ

「ぐふつ、『ほつ』『ほ…あー痛え』

壁にぶつかり止まつた

「つたく両腕に輝が入つたぜ」

両腕の輝が治るイメージ……

両腕が薄く緑色に光つた

「よし、動かせる。魔力で覆つてなかつたら、確實に折れてたな。それあの黒い物は一体……」

俺は両腕が動く事を確認して、ゴーレムの方に向くと……

「成る程、俺は殴られたのか……」

黒いのは、影か

「ゴーレムは殴った後の体勢で止まっていた  
それにしても…

「4つ分のダイナマイトで、あれかよ  
人で言う、肩、首の一部が抉れていて、一番酷くても胸板に軽くク  
レーターが出来る位だ

「グオ？オ？オ？オ？オオオオオオ

「ゴーレムゴーレム

「何だ？」

「石や岩がゴーレムに吸い込まれてく？

「お~お~、再生するのかよ  
こりゃあ骨が折れるな

「オ？オ？オオオオ

「再生が終わつたら早速攻撃かつ」

「真哉はゴーレムの右手を跳んで避けたが…

「何つ！」

突然、ゴーレムの右手が複数個の岩に分裂し、跳んで避けてる真哉を  
岩で囲み…

「くそつ」

「俺は汚い言葉を吐きながら魔力を全身に纏うイメージをした

魔力を纏つた瞬間、岩が右手に戻り真哉の頭から下を掴んだ

「ピシッビキッ

「ぐつ、ぐう」「

身体中からイヤな音が聞こえてくる

遂には…バギッガリッ

「がつ、ああああああああ

ゴーレムは掴んでた真哉を投げ飛ばした

ドンッ、ドーン、ザザー

真哉は地面に叩き付けられ、何回もバウンスし、地面を滑り仰向けの状態で止まつた

「ぐつ、はあ…はあ

俺は死ぬのか？

ゴーレムは両手を組み合わせ…

これで死ぬみたいだな

ゆつくり両手が上がつていき…

「はあ…」

シルフィーとシロと俺で美味しい物食いつこうと、約束したんだが…

真哉に向かつて振り落とした…

シルフィー、シロ悪いな…

「約束…守れそう、に無い」俺は目を瞑り死を待つた

…がいくら待つても、傷は痛むし、殺られた気がしない、俺は田を開けると…

「どう、なつ、てんだ?」「ゴーレムの動きが止まつて…いや、時間が止まつてる?『諦めるのですか?』

透き通る様な響く声が聞こえた

「誰、だ?」

俺は聞くが…

『もう一度聞きます。諦めるのですか?』

無視し、同じ質問をしてきた

この際誰でも良いか

「この状態、じゃあ、どう、しようも…」

『質問を変えましょ。約束の事はどうするのですか?』

約束…待てよ

「何故、それを…」

『何故知ってるのかは、後で答えましょ。今は私の質問に答えて下さい』

後で答えるって言つてるしまあ、良いか…

「今、すぐにでも、ゴーレムを、倒して、シロや、シルフィーと、美味しい物を、食いに行きたいさ…」

この時間が止まってる間にも倒したいが、体が動かねえし、イメージも出来ねえ

『その気持ちは、変わらないのですね?』

そんなの決まってる…

「当、たり、前、だ」

『ふふつ、そうですか…では、最初の質問に戻ります』

俺は、何故笑うんだと、聞きたいが止める事にした

『貴方は諦めるのですか?』

この状態じゃあ、どうしようもないが…

「俺に、まだ力が、残ってる、なら…諦めたくない!」

俺は力強く答えると…

『その言葉を待っていました。では、私が貴方の枷を外しましょう』

枷?

「どうゆう、事だ」

『ゴーレムを倒したら話します』

「分かつ、た」

力チリ

俺が答えた後に鍵が開く様な音がして、体に異変が起きた

「凄いな」

体の奥底から力が満ち溢れ、傷が治つていく

「よつ」「

俺は立ち上がり、両手を開いたり閉じたりをしながら、全身を調べた

「全部治つてゐる」

全身殆どの骨が碎けてたのに、一瞬で治つた

『ええ。貴方の枷を2つ外しました…』

俺つて枷が2つあつたのか。1つは多分再生と、分かるがもう一つは?

『この戦闘が終われば、もう一つ外します』

まだあるのか!…一体俺に何個の枷が付いてるんだ?

『では、頑張つて下さい』

「お、おー」

待てよと、言つ前に…

オ?オ?オオオ

時間が進み、ゴーレムの咆哮に遮られた  
体が治つたのは良いが…

「さつあと、変わってねえ」この距離じゃ避けられねえし…

「仕方ねえ」

俺は腕が砕ける覚悟をし、両腕を頭の上に伸ばしゴーレムの両手を  
受け止める姿勢をした

真哉が構えた瞬間…

ドーンッ

「ゴーレムが両手を振り落として爆音を鳴らし、辺りを砂煙で覆った

「 グオ？ オ？ オオオオ

ゴーレムが勝利の雄叫びをした

が

「 おいおい、まだ終わってねえよつ

ゴーレムの腕から体が持ち上がり、凄い勢いで壁に叩き付けられた

ドゴーンッ

「 まつたく、未だに信じらんねえな…

砂煙が消えていき…

「 無傷なんてよ

真哉が無傷で姿を現した

再生じゃなくて、身体能力だつたみたいだな

「 だがこの身体能力は、化け物の域を超えてるぞ」

振り落とされたゴーレムの両手の重さは感じなかつたし、何よりも  
数十ヶはあるゴーレムを片手で投げれた

そして…

「 2つ目の枷が何となくだが分かつたぜ」

ゴーレムを見ると、左脇腹に赤い点が見える。て事はそこ何かがある筈

オオオオオオ

ゴーレムが立ち上がり、吠えながら真哉に向かつて來た

やはり…

「岩の塊だからか移動スピードは遅いな  
此方から…

（真哉！真哉大丈夫！？）  
なつ！

（シ、シルフィー！ビ、ビうしたんだ？）

（今、真哉が居る鉱山にゴーレムが現れたって、キャロル村で噂になつてゐるから）

今、目の前にゴーレムが居るんだが…

（モ、そつか。なら急いで帰るよ  
心配はこれ以上掛けたくない

（うん、分かつた。気お付けて帰つてくるんだよ？）

（おつ）

「ふう…悪いが、一気に片をつけさせて貰う」

ゴーレムは俺の殺氣を感じたのか…  
グオ？オ？オ？オオオオオオ

右腕に岩を集め…巨大な岩の針を作り、それを真哉に向かつて放つた

俺も…

「お前に合わせてやる…」

右手を固く握り、ゴーレムへ向かつて跳んだ

オ？オ？オオオオオ  
「ゴーレムの岩の針と…

「うおおおおおおおお  
「真哉の右手がぶつかり…

ドーンツツツ

ぶつかった衝撃が凄く、辺りの砂や石、小さな岩を簡単に吹き飛ば  
した

オオオオオオオ

「おおおおお

ピシッピシシッ

僅かに均等を保つたが、ゴーレムが押され始め、徐々にゴーレムの  
岩の針に亀裂が入つていき…

ガリガリッガリンッガラガラ…

遂には、真哉が岩の針を砕き…

「悪いが…」

そのまま、右手をゴーレムの左脇腹に貫通させ、赤い玉を掘み…

これだな…

「俺の勝ちだ！」

一気に握り潰した

パリンッ

ガラスが割れる音がして…  
ドゴンッドンッガラガラ…ゴーレムが崩れていった

## 23話（後書き）

読んで下さりありがとうございました。出来るだけ更新を頑張ります

少し短いです

『ふう…終わった』

『お疲れ様です』

確かに、まだ説明して貰つて無かつたな

「ああ。説明頼めるか?」

『大丈夫ですが、歩きながらの方が良いかと』

そう言えば、シルフィー達が待つてゐるんだつた

「分かつた」

俺が歩き始めると…

『では、何から話せば宜しいでしょうか?』

そうだなあ

「先ずは、何故約束の事を知つてゐるのかを教えてくれ

『分かりました。私が、約束の事を知つてゐるのは…胸の辺りを見て頂ければ分かります』

胸の辺り?

俺は確かめるが…

「?何も無いんだが…」

特に変わった様子は、無かつた

『正確には、胸の中です』

胸の中?

「まさか…」

俺が、この世界に来た原因の変な石か

『ええ、そのままかです』

『どうやら、本当らしいな。だが…』

『俺達の声が聞こえるのなら、何故話し掛けでこなかつたんだ?』

『それが、私が何度か話し掛けてもどうやら聞こえて無い見たいで…』

何度も話し掛けで来てくれたのに、何故聞こえなかつたんだ?

『…何故か分かるか?』

『いえ、全く分からぬのです』

『そつか…』

俺にはよく分からんし、次の質問に行こう

『次の質問に行つて良いか?』

『ええ』

次は…

『枷の事なんだが…枷つて簡単に言えば、力を封じる物だろ?それが何故俺に付いてるんだ?』

大体封じられた覚えが無い…

『簡単に言えば、そうです。何故着いてるのかと言つと…私が付きました』

『どうゆう事だ？

「何故俺に、枷を付ける必要があつたんだ？」

『それは…』

声の人物？が突然言づのを止めた

「どうした？」

いきなり止められると、少し怖いんだが…

『いえ。余りにも次元が違いすぎる話しなので、言つても大丈夫なのかを迷つてしまつて』

そこまで、凄い話しなのかよ…

「少し考え方させてくれ」

俺は歩みを止め、考えた

『ええ。どうぞ』

「悪いな」

『いえ。ゆつくり考えて下さい…少し助言をさせて頂きますが…』

「なんだ？」

どんな助言だるづ？

『知らない方が幸せの事もあります』

確かに…

「ああ。参考にさせて貰つ」

次元が違うすぎる話しおか。どんな事が聞けるのか興味心4割、逆

に恐怖心6割…これを聞いたら戻れ無い気がする…それが吹っ切れるかもな。あの声の人?も言ってたが、知らない方が幸せの事もあるって言つてたが、知らないと後悔する事もあるんだよなあ。ふう、決めた…

「待たせて悪い」

『大丈夫です。決ましたのですか?』

「ああ。話を…聞かせてくれ」  
どうせ、後々分かって来る事だろうし、何より、後から分かる方が怖いしな

『宜しいのですか?』

「ああ。頼む」

気が変わらない内にな

『はい、分かりました。では、何故貴方に枷を付けたかと言つと…』

迷つてたのに、話してくれてんだ。俺も覚悟を決めよう

『貴方が不安定だからです』

「へつ?」

それだけ?

俺は拍子抜けし、変な声を出してしまつた

『勿論、これだけなら問題はありませんが…』

まだ続きをあるのか…あれで終わってたら、俺の覚悟が無駄になる  
といひだつた

『貴方自身に問題があるのです』

俺自身に?

「俺が不安定だと、何か不味いのか?」

『ええ。下手をすれば…この世界が終わります』

どうゆう事だ?世界の事は分かつたが…

「何故俺が不安定だと、世界が終わるんだ?」

『それは、貴方がこの世界と同じ存在…いえ。もしかしたらそれ以上かもしれません』

世界と同等…か。本当に次元が違すぎる話しだな

『もし貴方が怒りを感じるなら、それは世界の怒りと同じです』

そうなのか…そう言えれば…「俺、盗賊に怒った覚えがあるんだが…」

『ええ。あの時は流石に私も冷や汗を搔きました』

と言つ事は…

「まさか…」

世界の何処かが…

『いえ、貴方が心配する事は起きてませんから大丈夫です。怒った時間が短かったので、何とか私が抑える事が出来ました』

良かった。それと…

「悪いな。そんな事が起きてたなんて…」

知らなかつた。と言おうとしたが…

『いえ。知らなかつたのは、仕方の無い事ですので、お気になさらなくて大丈夫ですよ』

俺の言葉を遮り励ましてくれた

『それに…謝るのは私の方です』

「どうしてだ?」

何もされた覚えが無いし、寧ろ助けてくれたから、感謝をしたい位なんだが…

『貴方をこの世界へと連れて来てしました』

その事か…

「確かに、この世界へと連れて来られたが、別にこの世界が嫌いな訳じゃないぜ?」

シルフリーの話で嫌な部分は出てきたが、この世界自体は嫌いじゃない。寧ろ俺は好きだ

『私に怒りを感じないのですか?』

「ああ

「この人は自分に責任を感じてるんだな

『何故ですか？私は、貴方から大切な生活を奪つたのですよ？』  
うーん、大分自分を責めてるな…

『確かに一度と元の世界には、帰れないかもしない。だが俺は決めたんだ…自分の道は自分で決め、この世界で頑張ると』

『そうですか…』

「納得してくれたか？」

『はい…貴方に会えたのは、運命だったのかも知れませんね』

『運命…か

「そうかもな」

『私は、貴方を応援します。いつかきっと幸せになりますよ』

『俺を気遣つてくれる奴等が居るって事は、もう幸せなのかもな。』

「ああ、ありがとう」

もう少しで、出口だな

『それと、枷…外し……た』

『声が聞こえ辛い』

『何て言つたんだ？』

『も…時間…様…』

「待ってくれ、まだ聞きたい事が…  
聞こえないか

「後でまた、話そつな

『…』

一瞬声が聞こえた気がした  
そして、俺は鉱山の中から出た

## 24話（後書き）

総合評価が500を越えました。評価して下さった皆様本当にありがとうございます。これからも、頑張って投稿します

## 25話（前書き）

書き方が上手くなつてれば良いのですが、中々難しい

「うひ、眩し」

俺が鉱山から出ると…

「クロさん…」

誰かが驚きの声を上げ、近づいて来た

「クロさん…」

「大丈夫ですか！？、怪我はありませんか！？」

「ええ、大丈夫ですから落ち着いて下さい」

心配してくれてなんだな

「良かつた…これが落ち着いていられますかー僕はクロさんに何かあつたんじやないかと…」

心配してくれたのは、ありがたいんだが…長くなりそうだし、話を変えよう

「え、えーと、テツさんは何処に？」

「クロさんは僕の話を聞いてるんですか！？まあテツさんなら、キャロル村へ行きましたけど」

一様答えてくれるんだな

「ですか…では、自分達もキャロル村へ行きましたよ」

テツさんに殴られそうだけど、行かないとな

「ですから僕の話を聞いてるんですか！？」

「歩きながら、聞きますよ」心配を掛けた訳だし、聞かない訳には行かないよなあ

俺はキヤロル村へ向かって歩き始めた…

「あつ、待つて下さい」

リュウと一瞬に

30分後：

「ですから、ギルドに入る時は、気お付けて下さい」

「は、はい」

は、話しが長い。リュウがどれだけ心配したのかを散々聞かされたと思ったら、急にギルドの話になつて、何故かリュウの愚痴や、注意事項を説明された

「あつ、着きましたよ」

やつとか…

「はあ」

「何か、疲れてませんか？」

「いえ、大丈夫ですよ」

お前の仕業だと、言いたい

「そうですか… テツさんほ、ギルドに面ますよ」

ギルドは気になるが…

「何で、ギルドに歸るつて分かるんだ？」

「テツさんが、そう言つてました」

成る程

「何でリュウは一緒に行かなかつたんだ？」

「僕も行こうとしたんですが、テツさんに待つてゐる様に言われて」

そうか…

「取り敢えずギルドに行こう」

「分かりました。ギルドはこっちです」

リュウは、キャロル村の中心に向かつて行つた

「リュウが居て助かつたぜ」俺一人じゃ迷つてたな

「どうしたんですか？」

考へて止まつてたみたいだな

「いえ、何でもありません。行きましょう

「はい」

リュウは先頭を歩き、俺はリュウの後を付いていった何か村の皆が慌てている様な気が…

「クロさん、着きましたよ

「あつ、はい」

結構でかいな。学校の体育館位あるんじゃないかな

俺が扉を開けると…

「今すぐ王宮に知らせろー。お前らは村の皆を避難させ、皆を守れー。」

「分かりました！」

ギルドの中は、怒号が飛び交っていた

「い、一体、何が起ころるんですかー…？」

俺には分からんが…

「取り敢えず此処に居たら、邪魔になる。一旦外に出よ！」

「えつ？」

何を不思議に…あつ、敬語忘れた。もつ良いや…

「ほら、早く外に出るぞー。」

「あつ、はい」

俺達は外に出た…

「此処までくれば、大丈夫だな」

「それが、クロさんの素なんですね？」

だけどやつぱり、いつもの方が楽だ

「クロさんは、何で敬語を？」

「まあ、な」

「まあ、な」

うーん…

「特に理由は無いが、強いて言つなら…癖、かな。まあ癖でも、年下には使わないけどな」

「やうですか

俺も聞いてみるか…

「リュウは何で、冒険者をやつてるんだ？」

「ほ、僕ですか！？」

「そんなんに、驚く事無いだろ？」  
質問が変だったか？

「いえ、聞かれた事がなかつたので」

普通は聞かれないからな

「まあ、何でか聞いて良いか？」

「ええ、良いですよ…僕は施設で育つたんですよ  
リュウは、何処か遠い田をしながら言つた

！

「わ、悪い。そうとも知らずに聞いちまつて…もう聞かない」

俺はリュウに謝つた

「いえ、大丈夫ですよ…最後まで僕の話を聞いてくれますか？」

「聞いても良いのか？」

そんな簡単な話しじゃない筈だが…

「クロさんだからこそ、話したいんですよ」

「そ、そ、うか…じゃあ頼む」 隨分信頼されてるな

「はい…僕は施設で育ち、院長や、同じ施設で育つた人達と暮らし  
てたんですが、施設の経営が苦しくなつてきて…」

そんな事が…

「それで、リュウが冒険者になり、金を稼いだとしたのか」

「はい… ですけど、少しも上手く出来なくて…僕に冒険者は向いて  
無いんですかね？」

うーん…

「まだ経験が無いからだと思うぞ？ 誰だつて、これをやれと言われ  
て一回で出来る奴は少ないしな」

「そうなんでしょうか？」

簡単に納得は出来ないよな…

「まあ、まだ諦めるのは早いって事さ…それにリュウは、誰かに頼  
る事を知った方が良いぞ？」

施設だつてそうだ。リュウが冒険者にならなくても、皆で頑張れば  
何とか出来たかも知れないしな

「どうゆう事ですか？」

「俺みたいに、誰かを頼れば一人じゃ出来なくても、協力すれば出

来る事もある

俺は、リュウの腰に付いてる袋を指差した

「やう言えば……やう、ですね」

「なつ～もう少し頑張つて見ても遅くは無いだろ?」

「はい、ありがとうございます」

吹っ切れた様だな

「それで、相談があるんですが…」

「無理難題じやければ聞くぞ?」

「えーと、その…」

まさか…マジで無理難題!?

「また頼つても良いですか?」

何だよ。そんな事か…

「ああ、良いぜ何時でも頼りな

「本当にですか!…ありがとうございます!」

先ずは第一歩つて所かな

「あつ、テツやん」

うん？本当にテツさんだけじゃ、何かやつれてないか？

「リュウか、隣の奴は誰だ？クロに似てるが…」

テツさん本当に大丈夫か？

「何言つてるんですか、本物のクロさんですよ」

「ク、口…クロ…本当にクロなのか…？」

「ええ。本物ですよ」

俺は少し苦笑いしながら答えた

「その声は、クロだな…」

テツは突然顔を下に向け、真哉に近づいて行つた

何か、怖いんだが…やっぱり殴られるのかなあ

「クロ…」

俺は体に力を入れながら答えた

「な、何ですか？」

「すまなかつた！」

テツは凄い勢いで頭を下げた

な、何で頭を下げるの…？

「あ、頭を上げて下さいよ」

「それは出来ねえ。俺は…俺は…自分自身が情けなくてクロに合わせる顔がねえんだ」

情けなくて？

「どうゆう事ですか？」

「俺は、クロやリュウを危険な目に遭わしちまつた。俺がもつと警戒してれば、あんな事には……」

その事か

「ぼ、僕は大丈夫ですから……クロさんも、そうですよね？」

先に言われたか

「ええ。リュウの言つ通りです。それに生きて帰つて来れたんですから、自分は気にしてませんよ？」

「だが、それじゃあ俺の気がすまねえんだ」

納得しろよ。まったく…

「それじゃあ、貸しつて事で、どうですか？」

「貸し？」

「ええ。自分達が困つてたりしたら、助けると言つ事です」

「成る程… それで、クロ達が納得するなら良いが…」

「俺は提案した張本人だし…」「自分は大丈夫ですよ

「僕も大丈夫です」

「そ…うか… 分かった。じゃあ困つた事があつたら何時でも言つてくれ

ふう、やつとか…

「ええ」「はい」

「それじゃあ、俺は行く所があるから行くが、他に聞きたい事とかあるか?」

うーん、そう言えば…

「ギルドの中で、何が起きてるんですか?」

「それは、コーレムが出たからだ。それで、今王都に王国騎士団を派遣して貢う様に要請をしてんだ」

「お、王国騎士団…?」

「リュウ、いきなり大声出すなよ」

「そこまで驚く事なのか?」

「す、すいません。で、でも王国騎士団ですよ」

いや、俺に言われても王国騎士団なんて知らねえしな「そんなに凄いのか?」

「クロ、お前王国騎士団を知らないのか?」  
テツは若干呆れた様子で言った

「何て言えば…

「ええ。色々とあつて…」

「これ、大丈夫か?」

「まあ良い。王国騎士団つてのは、王国最後の砦と言われる程の実

力者達だ…

成る程、王国つて位だからかなり面積が多い筈、最後の砦つて事は相当強いんだな…ちょっと待てよ…

「ゴーレムつてそんなに強いんですか？」

「当たり前だろ、大きさによつて強さは違うが、あの大きさだと… SSSに近いランクつて所だ」

え、SS！かなり強つ！だけどそれを倒した俺つて…

「どうした？急に落ち込んで？」

「いえ、大丈夫です」

段々規格外になつてきてる

「でも、何師団が来るんですかね」

リュウは、興味津々だな

「さあな、今要請はしたが、王国騎士団が来るかは…  
うおおおおおお…！」

「うるさい…」

「ど、どうしたんですか！？」

「どうやら、王国騎士団が来る様だな」

「ドンッ！」

ギルドの扉が凄い勢いで開き…

「テツ…」

ガタイの良い、無精髭を生やした30代の男が出てきた  
だ、誰？

「どうした、ドレク」

「凄えぞテツ、今連絡があつて第3師団が来るってよ

「第3師団がー？」

何個師団があるんだよ…

「なあリュウ、歸団つて何個あるんだ…」

俺は小声でリュウに質問した

「確か…第9師団まであつた筈です」

多い、のか？

「そうか…第3師団つて強いのか？」

「かなり強いですよ。第1師団が一番強いですが、それでも3番目に強いです」

成る程、強い順になつてゐるつて事か

「そんじやあまた何かあつたら、聞かせてくれ

「おひ」

話が終わつた様だな

「あの人は誰ですか？」

先に言われたよ。まあ良いか…

「あいつは、ドレクって言つて、此処キャロル村のギルドの支部長をやつてんだよ」

「そりなんですか…」

「質問は、もう無いのか？」

俺は無いな…

「ええ。自分は、大丈夫です」

「僕も大丈夫です」

「さうか… そんじやあ困つた時は何時でも言つてくれよ?」

「はい」

「分かりました」

テツは走つて何処かへ行つた

もう夕暮れだな… そろそろセルードさんの所に行くか…

「リュウは、これからどうすんだ?」

「えーと、クエストに必要な物が手に入つたので、今日は宿で寝て、明日リローン街へ向かいます」

リローン街つて俺が行く所だつた筈…

「なら一緒に行かないか?」

「えつ? 良いんですか?」

「ああ、一緒にいらっしゃる。もう一人居るけどな」  
セルードさんに、言つと云つ

「ありがとうございます。じゃあ明日出入口で待つてます。お休み  
なさい」

「あつ、おこ」  
行動が早えな。それに時間決めて無いんだが……まあ、出来るだけ早  
く起きて、出入口に向かおう

俺はそんな事を考えながら、セルードさんが待つエルダーの宿へ向  
かつた

本格的に忙しくなってきたので、もしかしたら更新が出来なくなる  
かもしれません

いきなりですが、この小説書くのを止めます。あまりに酷いのでも  
つと腕を上げてから1から書き直します。応援して下せつた皆様本  
当にすいません

エルダーの宿に着いたけど…

「何か、此処まで来るのに長かったなあ」

「あつ、真哉だ。お帰り～」シルフィーは、手を振りながら真哉に近づいて行つた

「うん？ シルフィーか

「おう。ただいま」

あつ、そう言えば美味しい物食いに行くんだった

「それじゃあ、行くか？」

「何処に？」

「忘れたのか？

「美味しい物、食いに行かないのか？」

「今日はいいよ… 真哉は疲れてるでしょ？」

まあ色んな意味で疲れてるが…

「だけど…」

「美味しい物はリローン街に行つたら食べようよ、ね？」

うーん…

「分かつた… 悪いな」

「大丈夫だよ。今日はゆっくり休んで」

「分かった」

シルフィーはそう言い残すと首飾りになつた

俺、シルフィーにまた氣を使わせちまつたな…

「シロも悪いな。美味しい物食いに行けなくて」

キューイ

シロは首を横に振つた

「ありがとうな。じゃあ中に行くか」「

キューイ

俺は首飾りを身に付け、シロを頭に乗せてエルダーの宿に入つた

エルダーの宿に入ると…  
ガヤガヤガヤ

へえ、此処の宿つて結構人気なんだな

「それより、セルードさんは…」

おつ、あれか…

入つて宿の奥の方にセルードは座つていて、真哉に気づいたセルードは手で真哉を招いた

「セルードさん、すいません。遅くなつてしまつて

俺はセルードさんに頭を下げた

「いえいえ、無事に帰つてこられて何よりです。頭を上げて下をこ

「はい

「先ずは座つて、『』飯を食べましょ」

「分かりました」

俺は木製の椅子を引き、座つた

「どれにしますか？」

「どれつて言われても、俺この世界の料理を知らないし…  
「え、えーと…じゃあセルードさんと同じ物で」  
ナイスツ俺！

「分かりました」

チリーン

セルードは、丸い木製のテーブルにあつたベルを鳴らした瞬間…

「ツ！」

殺氣！

「そこか

俺はすぐに殺氣の出所を見つけ、飛んできた3つのナイフを掴み…

「動くな

殺氣を出してた奴の後ろに回り込み、首にナイフをそつと当てた

「何つ！」

「うん？ 声が高い様な…

「そこまで、ですよ。エルダー」

「はあ、そうみたいだな」  
エルダーは両手を上げた

「で、どうでした？」「…

どうゆう事？

「その前に…ナイフをどこで貰えるか？」「…

あつ…

「すいません」

俺はナイフをどこで、少し離れ警戒した

「そんなに警戒するなって」エルダーは苦笑いしながら言った

うーん、まつ、今は敵意も殺氣も感じ無いし良いか…

「はい」

俺は警戒を解き、体の力を抜いた

「結果から言つと…私の想像以上だな」

「そうですか」

2人は何の話をしてるんだ？

「真哉さん、すいません」

「な、何で、セルードさんが謝るんですか！？」

余計に分からないんだが…

「私が説明するよ」

まあ、俺は分かれば良い訳だし…

「お願いします」

「先ず、セルードと私は元パーティーの一員だつたんだ…」

「パーティー？」

何だそれ？

「パーティーとは、2人以上から作れるもので…」

「簡単に言えば、仲の良い奴と組んで協力するつて事だ」  
セルードの話を遮り、エルダーが説明した

成る程…

「あの、私が喋っていたんですけど？」

「あんたのは、話が長くなるんだよ」

「このままじゃ、喧嘩になりそうだな…」

「あの、説明の続きを…」

「そうだった。悪い…それで、パーティー解散後初めて私の宿に来  
たから、話をしてたら…」

あー、それで…

「自分の話が出来たと？」

「やつひつ事ね」

成る程…

「セルーデさん、エルダーさんに何て話したんですか？」

「え、えーと… 2つ名位強いと…」

セルーデは焦りながら言った

「あー！？ 何でそんな事を…」

「まったく、確証も無いこと言ひつけた

「だが、事実あなたは、2つ名クラス確実だよ

何で分かるの？  
「えつ？」  
「ええつ？」

「エルダーがやつひつならやつひですよ。エルダーはギルドランクはAですが、2つ名クラスと同等の強さを持ちますから」

「ええつ…？」  
「強つ！」

「しつかし、私の殺氣や攻撃を一瞬で見切るとはね… それにあの速さ、私が戦つたどんな2つ名よりも強いよ」

「あ、ありがと「やつひつ」」  
「あ、ありがと「やつひつ」」

「エルダーにここまで言わせるとは、真哉さんは、本当に凄いお人だ」

「セルードさんもありがとうございます」

この強さは化け物だけど、褒められるとなはり嬉しい

「よしひ、今日は気分が良いから、私がおじつてあげよ。好きな物頼みな」

「それは有難いんですが、今日は疲れてしまつて…すいませんが今田は遠慮します」

「そうかい…なら少し待つてな」

エルダーはそう言い宿の奥に行つた

「え、えーと、怒らせてしましましたか？」

「大丈夫ですよ、エルダーはあの位では怒りませんよ。」

そう言われても…

「そりなんでしょうか？」

不安だよなあ、せつかくエルダーさんの気分が上がったのに俺のせいで、落としたからなあ

「はい。それに待つてれば分かりますから

確かに…  
「分かりました」

俺等が話した少し後にエルダーが来た

「待たせたね。ほらこれを持っていきな…それとあなたの部屋は一階の奥だよ」

「ありがとうございます」

「バスケット？」

エルダーが渡したのは、大きめのバスケットだった

「いくら疲れてても、少しばか食べときな

「そうゆう事か…

「すいません…では先に失礼します」

「ああ。ゆっくり休みな

「真哉さん。お休みなさい」

「はい。お休みなさい」

俺は階段を上がり、奥に向かつた

部屋に着いて…

「へえ、結構広いんだな」8畳位か?ベッドが右側に2つあって、左側にタンスやクローゼットか

キュー

「シロ、あまり慣れ過ぎるなよ」

キュー

(シルフィーも外に出たらどうだ? 今なら、近くに人は居ないし)

(じゃあ、そうする)

シルフィーが答えた後首飾りが光り、小さい妖精に変わった

「それじゃあ、これを先に食べててくれ」

俺はエルダーさんに貰つたバスケットをシルフィー、シロの皿の前に置いた

「真哉は?」「俺は疲れたから…」

「駄目なんだよ。しつかり食べないと」

キューイ

「わ、分かったよ」

俺は2人?に言われて、バスケットの手前に座つた

「はい」

「ああ、ありがとう」

うん? バケットの中身はサンドイッチだったのか

「それじゃあ、いただきます」

「いただきまーす

キューイ

「…美味しいな」

明日エルダーさんにお礼を言つといつ

俺は3つ程サンドイッチを食べ……

「じゃあ俺は寝る。後は全部食べてくれ

「分かったよ」

キュイ

返事を聞いてから、ベッドで眠りについた

「此処は？」

白い空間？

真哉は、辺り一面真っ白の空間に浮かんでいた

何だ、これ？夢か？『また、会えましたね』

「その声は……」

俺は声のした方に振り返ると……

正に女神と言う名に相応しい女性の人人が居た

「……凄い」

凄い、の一言では表せないが今はこの言葉しか思いつかない

『ふふつ、ありがと「ひー」やります』

「あつ、そうだ

「いえいえ。所で、此処は？」

『此処は、あの世界…ディアルとは別の空間です。そして私が唯一存在する事が出来る場所です』

あの世界は『ディアル』って言つのか…此処が『ディアル』とは違つてのは分かつたんだが…

「唯一？」

『はい。私は『ディアル』で創造神として存在しているのですが…』

「ま、待て待て」  
そ、創造神？

「俺つて、もしかして凄い存在と話してゐるのか？『俺は小声で呟いたが…』

『いえ、貴方様の方が、私よりも存在が上ですよ』

貴方様つて：

「その、様は止めてくれ。真哉つて呼んでくれないか？』

「それは出来ません。私は貴方様より下の存在なのですから…」

はあ、下とか上とか関係無いだろ

「様とか言わると、違和感があるんだよ」

『で、ですが…』

「頼む」

「…分かりました。真哉がそこまで盡つたのであれば、そつしまや」

「あつがとつ」

26話（後書き）

中途半端ですが終わりです。1週間経つたら消します  
急で本当にすいません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7773t/>

---

高校生の異世界生活

2011年10月6日18時06分発行